

390
24

にめたの女處

~~390
24~~

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



特

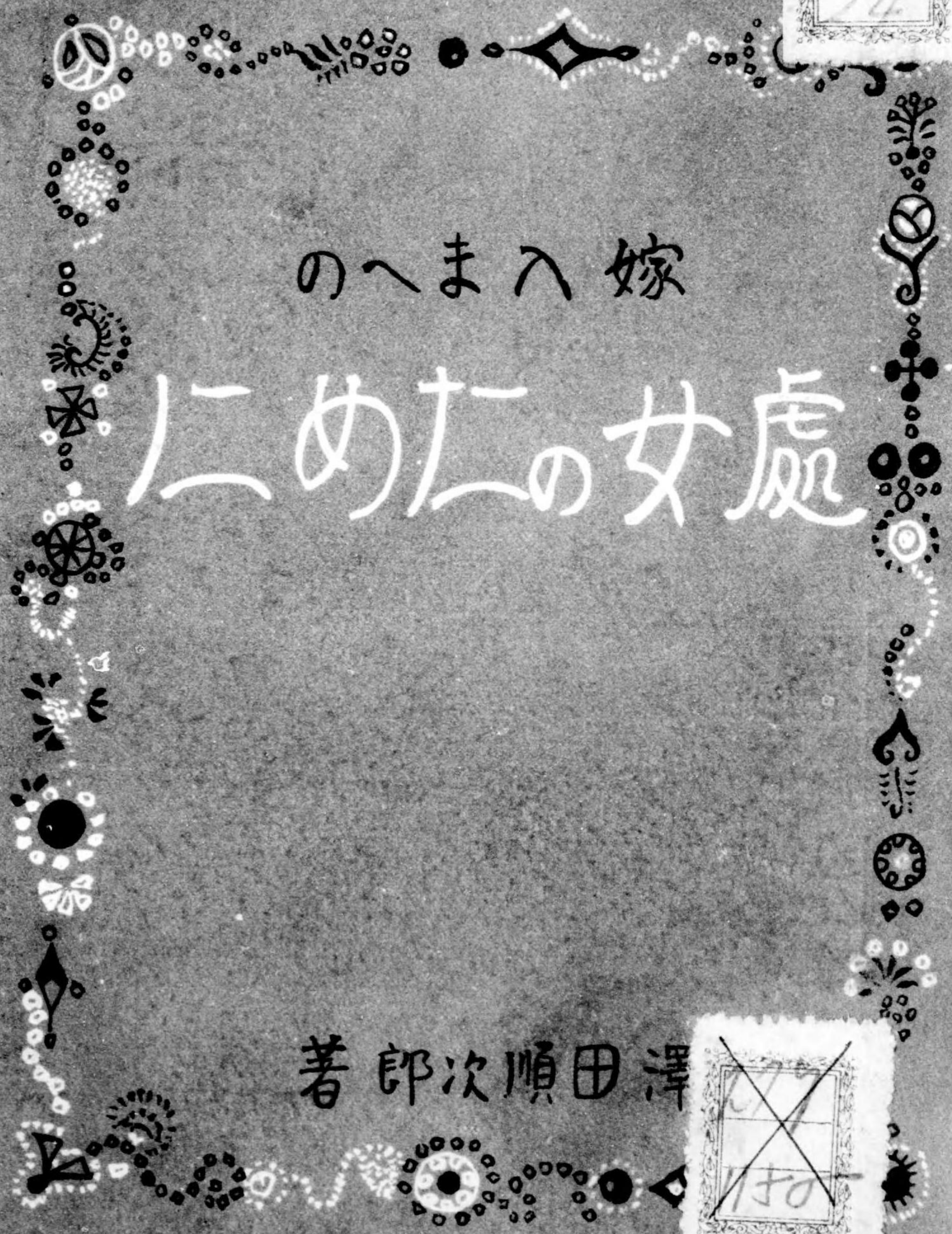
390
94

嫁入まへの

處女のために

澤田順次郎著

~~390
94~~



牛



390-24 103
759

性 的 叢 書

第 壹 編

嫁 入 前 の

處 女 の 爲 に

全

東 京

天 下 堂 書 房 發 兌

大 正
9. 1. 30
交 内

性的叢書發刊の趣意

予は多年、性の研究に没頭し、既に數十部の著書を刊行したけれども、此の學の範圍は、極めて廣くして、人事のあらゆる問題と交渉を有し、物として、之れと關係を有せざるものはない。予のこれまで發表したる書は、僅に性の輪廓、或ひは其の一部分を瞰取したるに過ぎずして、未だ開拓せざる性の原野は、茫々として極まらがないのである。之れをニュートン氏の言を藉つて言へば、吾人の性的知識は、恰も濱邊の眞砂子に等しく、其の未だ知らざる眞理は、洋々たる大海の如く、前に横つて居るのである。

そも性は、人生の根本問題にして、人間を支配する大動力たるは、言ふまでもなく、社會の經濟的方面を除いては、他は悉く性的問題に屬するものなることを、記憶しなくてはならぬ。シルレル氏が哲學者は如何に言ふとも、世は飢と戀との持合

はせなりと、言つた眞意は茲にある。人生は甚はだ複雑にして、紛糾せりと雖も、結局は自己の生活と、種の保存との爲めに、働くに外ならざることとは、何人も否認することを得ないところである。此の事實に依りて考ふれば、性と個人及び社會との間に、密接なる關係の存することが判明る。社會の淫風、惡俗を矯正して、人心の向上をはかるのも、將又、反對に其の淫風、惡俗を助けて、愈々墮落に陥るのも性の適用を得ると得ざるとにあること、恰も利刀の使ひ手に依りて、能くも切れ、自ら傷つくこともあるが如くである。性慾を適用するといふことは、實だに其の子孫蕃殖の道を、完全にのみならず、社會の裏面に生ずる諸多の罪惡を除いて人生の福祉を、増進するにあることを思はなくてはならぬ。試みに其の利益を列擧すれば次ぎの如くである。

- 一 男女の放蕩、淫逸を矯め、自殺、情死等を防止し得ること、
- 二 姦通、私通、野合等の如き、不義敗徳を防ぎ、墮落を救濟し得ること、

三 私生兒を減少し得ること、

- 四 性慾の壓迫より生ずる同性愛、屍姦 *Leichenschändung*. 獸姦 *Thierschänder*. 其の他人爲的遂情の如き、倒錯性慾を防遏し得ること、

- 五 重婚、墮胎、殺兒等すべて性慾より生ずる犯罪を、豫防し得ること、

- 六 妾、藝娼妓其の他賣淫婦の範圍を減少して、淫風を防止し得ること、

- 七 花柳病其の他不正の性交より生ずる疾患を防止して、國民の健康を保護し得ること、

- 八 國民の早老、早衰、神經衰弱及び比斯的里等を、豫防し得ること、

- 九 窮乏、零落、其の原因の墮落より生ずる經濟的貧困を、救濟し得ること、

以上は、性慾を適用して、之れを善良に導びきたる結果、生じたるものである。然るに若し之れを不問に附して、人々の放縱に任せんか、其の結果は右と全く相反して、恐るべき害毒を、社會に流布するに至るは、昭々として明らかである。即ち

性的叢書內容書目

四六版二百頁内外、上製箱入
一冊 金壹圓廿錢、郵稅六錢
拾貳冊 送料共金拾參圓五拾錢

- | | | | |
|-----|------------|----|-----------|
| 第一編 | 【處女の爲めに】 | 一冊 | 既刊 |
| 第二編 | 【主婦の爲めに】 | 一冊 | 大正九年一月中出來 |
| 第三編 | 【神祕なる同性愛】上 | 一冊 | 同 九年二月中出來 |
| 第四編 | 【神祕なる同性愛】下 | 一冊 | 同 九年二月中出來 |
| 第五編 | 【性的衛生及豫防】 | 一冊 | 同 九年三月中出來 |
| 第六編 | 【性と花柳病】上 | 一冊 | 同 九年四月中出來 |

- | | | | |
|------|--------------|----|-----------|
| 第七編 | 【性と花柳病】下 | 一冊 | 同 九年四月中出來 |
| 第八編 | 【賣淫と賣笑婦】 | 一冊 | 同 九年五月中出來 |
| 第九編 | 【色情狂】 | 一冊 | 同 九年六月中出來 |
| 第十編 | 【性的教育及び實施法】 | 一冊 | 同 九年七月中出來 |
| 第十一編 | 【文藝に現はれたる戀愛】 | 一冊 | 同 九年八月中出來 |
| 第十二編 | 【性に關する傳説】 | 一冊 | 同 九年九月中出來 |

計 十二冊

執筆者 澤田順次郎

贊助員

(次第不同)

農科大學教授
巢鴨精神病院長

順天堂病院泌尿科長

中央新聞編輯長	元搜索係長	文學士	醫學士	醫學博士	早大教授	醫學博士	法學博士	醫學博士	理學博士
田村三治	山本清吉	森田草平	杉江薰	坂口勇	安部磯雄	田中友治	大場茂馬	石川貞吉	石川千代松

國民教育社長
開發社長

帝國大學醫科大學教授
京都醫科大學教授
九州醫科大學教授

國民新聞社會部長
警察協會雜誌主事

同	同	醫學博士	文藝家	高等女學校長	同	教育家	同	文藝家	國民新聞社會部長	警察協會雜誌主事
榑保三郎	藤波鑑	大澤謙二	佐藤俊子	廣瀨太平	湯元武比古	多田房之輔	谷崎潤一郎	小川未明	後藤狂夫	渡邊利喜松

花柳病の蔓延、私通野合の流行、私生児の増加、自殺情死の流行、猥褻罪の増加不良少年少女の増加、墮胎嬰兒殺しの増加等の如きにして、此れ等の罪惡は、近來益々多くなつて、家庭を紊し、社會を破壊せんとしつゝあり。豈に寒心せざるべけんやだ。

近年性慾問題が、世界の大勢となりて、各國の學者に討究せられ、研鑽せらるゝやうになつたのは、結構なこと、我が國でも早くさういふやうに、なりたいものと、予輩は常に希望して居るのである。此目的に於いて、予は性を研究し、而して倫理を明らかにして、人生問題解決の一端に、資せんと欲したけれども、周圍は、未だ眞面目ならずして、事我が意と違ひて、反對なる結果の生ずることが、尠くないので、全力を此研究に竭くすことの出来なかつたのは、遺憾である。而かも性の範圍は、極めて廣く、あらゆる人事の問題と、吻合せざるものなきこと、前に言へるが如くなるに依り、此れ等の全般に涉れる事實を纏めて、之を統一するにあらざれば、完全なる性の研究は、得られざることを悟つた。これ本叢書を發刊するに至つた所以である。

序 言

女には、男の知らぬ秘密が、極めて多くある。例へば月經の如き其の一で、女は之れを秘密にして居るから、男の知りやう筈はない。妊娠も同様で、女は妊娠しても、初めの中は、之れを秘密にして居る。此れ等は女の生理的現象として、當然起ることなれば、少しも秘密にする謂はれないけれども、女はそれを恥辱の様に思つて居る。

又、戀や愛に於いても、女は之れを秘密にする。心に思ふ人があつて、來來の夫と頼むほど、焦れて居つても、女はそれを口に出すことはない。男なれば心を打ち明けて言ひ出すことも、女は秘密にして、打ち明けることは、殆んどない。謂はゆる戀病の、女に多くあるのも、之れが爲めで、男には滅多になく、若しありとすれば、それは柔弱な女性的の男で、男性的の男ではない。

筒様に女の秘密的にして、男の露骨的なのは、各々其の心理を異にして、女は先天に羞恥心に富める爲めもあるが、一つは保守的にして、生理上受動的任務を負ふからである。併し女の此れ等の性質は、年の行くに随つて、漸々に消へて、多少男性的にもなるし、又結婚後は異性に絶えず接觸する關係上、その邊の消息も了解つて來るから、從來とは趣きが變つて來るものである。けれども處女は矢張處女で、之れを了解する機會がないから、秘密は何時までも秘密となつて、解かることはない。

斯くの如く處女に於ける秘密は、恰も謎の如きもので、彼れ等は唯だ想像をもつて、之れを了解しやうと、煩悶するのである。それが爲めに、種々の迷ひを生じて、其の結果は誘惑に懸かつたり、或ひは悪しき行爲に觸れたりして、身を誤ることが多くあるから、處女自身の修養は勿論、周圍に於いても、適宜の方法をもつて、之れを教訓しなくてはならぬ。

併し倫理道德のこと、違ひ、謂はゆる女の秘密に關することは、從來の習慣として家庭でも、又は學校でも教へることはなかつた。それが爲めに結局處女は、其の身を誤ることになるのであるから、家庭と學校とで、適宜之れに關する理解を與へることを忘れてはならぬ。

それから貞操問題に就いては、貞操はもと、男が女に對して、其の純潔を尙ぶ心から、貞潔を強いたのが、習慣になつたもので、生理的方面と、道德的方面とより成り、立つて居るといふ、哲學的思想は、別に鼓吹するに及ばないが、男が婦人にのみ、貞操を強ひるのは、自己の愛する女が、他に奪はれ、又は其の女に逃げられまいかと心配する、野蠻時代の習慣で、嫉妬の變形であるといふことは、本文に詳しく述べてあるが、恚ういふことも、一應は知つて置く必要があると思ふ。

併し處女に、貞操のことを教ゆるには、餘程慎重にし、注意して誤解を傳へないやうにせねばならぬ。唯だ操といつても、處女には何のことやら、解らないものが多くあるであらう。それを只、女は操を守らなくてはならぬといつたところで、何

の役にも立たぬ。といつて女は、一度人の妻となつた以上は、如何なる事情があらうと。決して歸つて來てはならぬ。再婚してならぬといふ舊道徳を固守するのも、何うかと思ふ。これらは家庭でも、學校でも、よく説き聞かせなくてはならぬこと、信ずる。

性的叢書第一卷としての此の書は、恁ういふ婦人、特に處女の秘密方面に關して、其の解決を與へ、又、性的方面に於いては、貞操を如何に守るべきか等の問題を、具體的に説明したものである。處女を中心としては居るけれども、之れに關聯して、周圍の事物にも、觸れたところが多くある。即ち婦人一般に涉り、又男に關しても、或る點までは引き合せてあるから、青年男女の爲めに、參考となるを得ば、幸ひである。

尙、現代の青年男女は、思想に於いて、僅かの歲月の間に著しく變化して居ることとは事實で、中には甚はだ憂ふべき、傾向の見えるものもある。併し男子のことに就いては、別に述ぶる心算であるから、此の書には略してある。終はりに、此の書を讀まるる方は、拙著『性慾に關して、青年男女に答ふる書』を參考して貰いたい。關係が多いけれども、同書にあることは、本書に略したから、兩書を合して看ることが必要である。

大正八年十二月

著者識す

前嫁の**處女**の爲めに目次

はしがき……………一

第一 處女の生理的及び病理的方面に關して……………二七

一 美妙にして而かも危険多き破瓜期……………二七

1 破瓜期とは何ぞ……………二七

2 婦人の出發點としての處女……………一九

3 破瓜期に於ける處女の身體的變化……………二三

4 破瓜期に於ける處女の精神的變化……………二七

5 破瓜期に於ける處女の危険……………三三

二 破瓜期を意味する初經……………三六

- 1 月經とは何ぞ……………三六
- 2 初經の徴候……………三九
- 3 初經の來潮する年齢、其の遲速の利害及び之れに對する注意……………四二

三 法醫學及び美術問題として處女の鑑定……………四六

- 1 二少女の例……………四六
- 2 身體上の退行變化……………四九
- 3 性交反應……………五三

四 處女の罹り易き疾病……………五三

- 1 破瓜病……………五三
 - A 萎黃病
 - B 遺傳病
 - C 脊柱彎曲症
- 2 比斯的里及び神經衰弱……………五五

- 3 處女に來たる精神病……………五九

第二 處女の美的方面に關して……………六一

一 其の美しき身體……………六一

- 1 蓮花娘の如く……………六一
- 2 處女の皮膚……………六三
- 3 美術家のモデル觀……………六五

二 婦人の身長を伸ばすには、處女時代に於いて、運動をよくするにある……………六七

- 1 先づ男女の身長に差あることを知れ……………六七
- 2 男女の身長に差ある原因……………七一
- 3 何故女は脂肪に富めるか……………七四

- 4 運動は身長を伸ばし、容姿を美にす……………七六
- 5 男女の運動に如何なる違ひあるか……………七九
- 6 疲労は何うして起こるか、其の男女に於ける差異……………八一
- 7 男性化の傾向ある現代處女の體格……………八四

三 處女の乳房……………

- 1 處女の乳房、乳房の意義及び其の性的關係……………八七
- 2 乳房の位置及び其の形態……………八九
- 3 乳房の構造及び其の發生……………九一
- 4 婦人美としての乳房……………九三
- 5 乳房の變化と民事問題……………九六

四 臀部と性的關係、及び其の形態に於いて處女と……………

非處女とを識別する法……………

- 1 臀部の生理的機能と美的形容……………九九
- 2 臀部の大小と姿勢……………一〇〇
- 3 視覺の錯誤に於ける婦人の裝飾美……………一〇五
- 4 臀部の大小形容に關する、世界各民族の習慣……………一〇八
- 5 處女の臀部と其の特徴……………一一二

五 美の標準及び處女と非處女とに於ける美の比較……………

- 1 先づ男女に於ける美の優劣を定めよ……………一一三
- 2 文藝上及び人類學上より觀たる美人の品評……………一一五
- 3 婦人の眞美は處女にあるか將又非處女にあるか……………一二九

第三 處女の性的方面に關して……………

一 處女の戀愛と性慾……………一三三

- 1 性的生活に入るの序幕……………一三三
- 2 處女の感情と戀愛……………一三五
- 3 如何にして處女の感情を融和すべきか……………一三九

二 處女の誇りとしての操……………一三三

- 1 操の意義……………一三三
- 2 結婚と操……………一三五

三 女處と結婚……………一四〇

- 1 結婚と生殖……………一四〇
- 2 結婚思想の男女に依りて異り且つ女子の早く此思想に染むる原因……………一四二
- 3 如何に結婚問題を解くべきか……………一四五

四 適當なる結婚と不適當なる結婚……………一四八

- 1 適當なる結婚の條件……………一四八
- 2 不適當なる結婚の數々……………一五〇
- 3 疾病あるものとの結婚……………一五三
- 4 變質徴候を有し、又遺傳素質を有するものとの結婚……………一五四
- 5 酒客又は不品行なるものとの結婚……………一五六
- 6 年齢の甚しく懸隔せるものとの結婚……………一五八
- 7 身分の釣合はざるものとの結婚……………一五九
- 8 愛情なきもの及び品性の良からぬものとの結婚……………一六一
- 9 無能なるものとの結婚……………一六二
- 10 教育なきもの及び思想の反對せるものとの結婚……………一六三

五 悲惨なる離婚と平和の秘訣……………一六四

1 離婚より起る損害は男よりも女に多い……………一六四

2 平和の秘訣……………一六七

3 嗜の徳……………一六九

結び……………一六九

目次「終」

前嫁の 處女の爲めに

澤田順次郎著

はしがき

茲に女子の、或る一部類に對して、處女なる特殊の形容詞がある。これは英語の Meid、獨逸語の ein junges Mädchen 又は eine junges Dame. といふ語に當るが、之れを解釋すると、妙齡となつて、結婚には適するけれども、未だ獨身で居る女子を指して謂ふのである。

併したゞ是れ許りでは、處女の意味が明らかでない。先づ年齢の上から言ふと、破瓜期即ち十四五歳から二十四五歳に至るまでの間で、結婚すれば立派に新婦と

はしがき

なられる資格を具へて居るのであるが、結婚しないで居るので、處女と名づけるのである。

そこで處女とは、如何なる女子を差して謂ふか、之れに乙女、娘、或ひは少女なる異名もあれば、又、處女に似て而かも處女でないところの、謂はゆる似非處女もある。故に處女の定義を立てるには、先づ(一)破瓜期に達せること、(二)生殖機能の開始せること、(三)貞潔無垢なること、三條件からして、説いて行かなくてはならぬ。

破瓜期のことは、本文第一に詳しくあるに依り、略して茲にはたい、一言に止めて置く。それは破瓜期の特徴たる月華の來潮する時期であつて、此の時期に達すれば、女子の身體は一變して、無邪氣であつた小兒から、成人の仲間入りをするのである。此の破瓜期は、幾歳で茲に達するかといふに、それは人種や、氣候や、土地の習慣や、體質や、又は生活狀態等、種々の事情に依つて、一定しないが、我が國

で見ると、大抵十四五歳である。語を換へて之れを言へば、女子は十四五歳になると、天華開通し、其の結果として、身體に生理的變化を生ずるのである。此の變化には種々あるが、其の中にて最も重要なものは、即ち生殖機能の開始することである。

生殖機能とは胎内に子を宿して、之れを生む作用のことである。これは破瓜期に達して、生殖器が成熟しなければ不可能である。語を換へて之れを言へば、生殖器が発達して、子を生むに適するやうになるので、其の徴候として、天華が開通するのである。故に生殖機能の開始は、天華の初潮と一致して、天華が開通すれば、生殖機能が開始したと看做して誤りがない。女子は此の時期から、毎月定期的に、排卵作用(卵巢のグラーフ氏胞が破裂して、卵子を喇叭管に輸り出す作用をいふ)が行はれて、異性に會へば受胎して、子を生むことが出来るのである。

斯くの如く破瓜期に達して、生殖機能が開始するやうになれば、最早、結婚して

も差し支へがないのであるが、併し結婚は、家庭的又は社會的問題が主で、生理上の問題の、之れに與らぬ場合が多いので、たとひ其の生殖機能が開始したにしろ、女は一家の都合上、或ひは社會的關係等の爲めに、容易く結婚するといふ譯に行かないことが極めて多くある。

往昔ならば、女は十五六歳にもなれば、大抵結婚して花嫁となつて居たものであるが、今日は生活上の關係からして、二十歳になつても、二十五歳になつても、結婚することが出来ないで、獨身で居る者が少なくない。それで破瓜期に達して、生殖機能が開始しても、貞潔無垢で居る場合には、之れを處女と名づけて、他の既婚婦と區別するのである。

如上の事實に依るときは、處女の範圍は頗る廣く、破瓜期の十四五歳を出發點として、それから以後の未婚時代を包括するので、獨身の場合には、六十歳になつても、或ひは七十歳になつても、處女といふことになるが、併しそれでは餘り殺風景

で、處女の趣味を没却して了ひはせぬかと思はるゝ。何となれば處女といふ言葉は元、詩歌的の語で、實際に處女其の人は、優美で淑かでなければならぬからである。即ち初々しく、嬌羞を含みて、纖弱いところに處女の趣きがある。

そも處女の趣きなる此の初々しさは、處女の特有なる羞恥心より、彩られたる特徴であるのである。然るに此の嬌羞的色彩は、結婚後次第に薄らいで行くことは、人の知る如くである。そののみならず結婚は爲さなくとも、年を取つたり、又は世故の風波に揉まると、揉まるゝほど、羞恥心は減滅するのである。俗に之れを世故に慣れるといふが、筒様に浮世の風に當たると、羞恥心が消えて行く。特に老年になつて、頭に戴く霜を、白髪染めとやらいふ薬で、黒く染め直す年になると、殆んど羞恥心は消えて、跡方なくなるものが多い。

又、結婚もせず、年も取らない若い女でも、多くの異性に接近して、人に擦れると、其の羞恥心が消失して、謂はゆる擦れツからしとなり、又は娼性となるもので

ある。前者は即ち萬年娘で、後者は賣笑婦の類である。簡様にして無羞恥となるだけ、一方には意志が強く、大膽になつて、昔の初々しい趣きや、纖弱いところが見えなくなつて了うのである。さういふ露骨で、男を男とも思はないやうなあばずれ娘や、老婆や、乃至は藝者女郎のやうな者までも、獨身だからといふて、處女と言つたならば、滑稽の極みである。之れを聞いて噴飯せざる者があらうか。

斯くの如く身の純潔でない者は勿論、羞恥心の缺乏して、其の心の荒んで居る者は、たとひ年が若からうと、顔が美しからうと、決して處女の資格が無い。處女といふことを、通俗の言葉で最も分かり易く言へば、生娘といふことである。此の一言で處女の眞意が了解せらるゝであらう。

併し單に生娘と言つただけでは、處女の定義に、未だ足りないところがある。それは年齢のことで、前にも一寸言つてある通り、幾歳から、幾歳までを、限つて處女といふのであるか、重ねて詳しく述ぶる必要がある。

そこで處女の定義を下すには、國法にて定めたる結婚年齢を基礎として、それから結婚に父母、又は親權者の同意を得なくとも、結婚することの出来る年齢までも限局せねばならぬ。此の法律上の規定といふのは、即ち、

民法第七百六十五條の、男子は滿十七年、女子は滿十五年に至らざれば、婚姻を爲すことを得ず。

といふのと、

民法第七百七十二條の、子が婚姻を爲すには、其の家にある父母の同意を得ることを要す。但し男子が滿三十歳、女子が滿二十五歳に達したる後は、此の限りにあらず。

といへるのとの二條項で、此の十五歳から二十四歳までの、十年間は、父母又は親權者の、保護監督を受けなくてはならぬから、此の年間にある未婚の女子は、處女として取扱ふことを得るのである。繰り返して之れを言へば、結婚年齢に依つて

女子は初めて生殖機能の開始を意味し、二十五歳に至つて、父母又は親権者の保護を、離るゝことが出来るのであるから、此の意義を具體的に説述すると、次ぎの如くならねばならぬ。

處女とは、十五歳以上二十五歳以下の女子にして、結婚せず、又未だ結婚したることなき者を謂ふ。

といふことになる。茲に結婚といふことには、正式の結婚は勿論、私婚も含んで居る故に、異性に接したることのある女子は、若くとも處女と謂はれぬことは、前に言つた如くである。

之れが即ち處女の定義であつて、處女といふことの中には、初めて、新らしき又は試みたことの無いといふ意味が、含まれて居る。代議士が初めて演壇に現はれて、演説するのを處女演説といひ、又、學者が初めての著作を、處女作といふのも此の意味で、撤頭撤尾純潔の乙女でなければ、處女といふことは出来ぬ。

之れに依り茲で似非處女即ち處女に似て、而かも處女でないものを區別しなくてはならぬ。先づ之れを表示すると次ぎの如くなる。

- 未婚婦にして異性に接したることある者、
- 女給、酌婦等の類、
- 賣笑婦、
- 老嬢、
- 奥御殿の老女、
- 寺院の女僧(尼)、

此の點に於いて彼の謂はゆる新らしい女なる者も、右の定義に準據すれば、處女として差し支へがないけれども、異性と通じたことのあるものは、其の資格を失ふこと、重ねて言ふ必要はない。獨り新らしい女ばかりでなく、酌婦、女給、其の他の女にても、表面に處女を装ふて、内實處女でないものが甚はだ多くある。甚はだ

しきは賣笑婦であつて、處女を装ふ者がある。これ處女は貞潔なるところに、誇りがあるに依り、之れを模倣せんとするからである。

簡様にして彼れ等は、處女として結婚し、而して其の初々しき態度をもつて、其の夫を瞞着せんとするのであるが、無經驗の夫は、譯もなく欺騙せられて、處女と信するけれども、經驗のある夫は、その非を看破して、新婚早々家庭に紛糾の上ることがある。

然るに又、經驗のある夫にても、處女と非處女とを區別し兼ねて、偽處女に瞞着せらるゝことが、珍らしくない。これに就いては専門の醫師ですら、時とすると其の鑑識を誤ることがある程だから、素人でその鑑定の附かない場合のあることは、當然である。此のことは本文第一に詳しくあるから、茲には略して置く。

それから賣笑婦である。賣笑婦とは報酬に依つて、其の身を提供するもので、娼妓又は私娼の凡べてを、總稱して言ふのである。彼等の大部分は、定まれる夫がな

く、年も若くあるけれども、節操といふものは、微塵ほども無い。彼れ等は金錢に依つて其の身を賣り、節操を問ふことはない。定まれる夫は無いけれども、日夜稜重ぬる男の數は限りなく、謂はゆる一夜妻となつて、其の日を送るのである。一定の配偶者が無いとしても、節操がなければ、處女でないことは言ふまでもない。

次に老嬢は、五十六十のお婆さんで、獨身生活をして居るものである。日本には少ないが、西洋には頗る多く、特に女學者、女優などに多くある。何々嬢といふのはそれで、表面は兎も角、一度も結婚しない點に於いて、處女たるの觀があるけれども、年齢の上に於いて、老ひたる處女といふ意味で、區別しなくてはならぬ。

如何なる理由で、老嬢は日本に少なく、西洋に多いかといふに、西洋では劇烈なる結婚難の爲めに、結婚することが出来ない結果、自然獨身で暮らす者が、多く出る譯であるが、日本ではさほどまで、結婚難が迫つて居らぬから、大抵の女子は、適當の時期に結婚して了うのである。併し一部の女性間には、結婚せずに終はる者も

ある。例へば佛道ぶつだうに入れる女僧にょそうの如き、又は往昔の大名の奥おくに、勤めた老女の如きもので、彼れ等こそ全く純潔じゆんけつの身であつた。

さて處女は、純無垢じゆんむくにして、月の如く清らかなところに、氣高き品位がある。貞潔にして花の如く、一點の汚れなきところに誇りがある。されども月には之れを蔽ふ簇雲むらぐもがある如く、又、花には之れを蠹する害虫がちゆうなどの多くあるが如く、其の清き處女を侵して、之れを玩弄ぐらんりゆうせんとする者が、處女の身邊に甚はだ多くある。女子の一生の中にて、最も誘惑ゆうわくの多いのは、處女期であるから、此の時期に達したならば父母及び親權者しんけんじやたる者は、十分に警戒して、處女の身邊に蝟集むしじゆうし來たる害虫を、防遏ぼうえつしなくてはならぬ。

それと同時に、處女其の者も、身體しんたいの變化へんくわに連れ、精神に大なる動搖どうりやうを來たして、其の誘惑ゆうわくに乗せられ易くなるに依り、處女の外部を警戒けいかいすると共に、其の内部を慎しんしみて、豫め危害きがいに對する方法を講こうじなくてはならぬ。然らざれば不測ふそくの災害

を被かむりて、取り返しかへしの附かぬことになる。

斯くの如くしとやかに、美しくして花の如くなる一面に、危険きけんの籠こもれる此の處女を、人類學、生理學、審美學、心理學、社會學、犯罪學及び教育學等の各方面より討究たうきゆうして、其の體格、心性しんせい、習慣しゆかん及び其の生活狀態を明らかにすることは、處女の本性本質に到達する所以にして、處女の科學的研究といふべきである。これ理論上にては處女に籠こもれる神秘しんぴの闡明せんめいとなり、實際上にては處女の修養となりて、一般に婦人の幸運こううんを、開拓すべき捷徑せうけいとなる。何となれば婦人は、處女を基礎きそとして、出發したものであるからである。

筒様に處女の研究は、重要であつて、衛生上から見ても、教育上から見ても、將又、婦人問題の上から見ても、第一に解決かいけつしなくてはならぬ問題である。然るに従來、世人は之れを閑却かんきやくして、處女に關する研究を怠つた。これ處女を小兒せうにと看做みなして、其の中に入れなければ、大人に隸屬れいぞくせしめて、小兒と大人との中間に、處女と

いふ者の存在することを、知らなかつた爲めである。

それ故婦人に就いては、研究した者も多くあるけれども、處女としての研究は、極めて不十分であつた。それを漸く學術的に研究するやうになつたのは、最近である。それは米國の心理學者スタンレー・ホール Stanly Hall 氏、英國の性學者ハツエロツク・エリス Havelock Ellis 氏、及び獨逸の性學者アルベルト・モツル Albert Mool 氏等で、ホール氏は主に心理學上より、エリス氏は人類學上より討究し、而してモツル氏は、性的方面に就いて努力した。此の他の學者には獨逸のストラツツ氏、コートルマン氏、エミル・シユミツツ氏、瑞典のアクセル・キー氏、英國のロバート氏等有名である。

處女の研究を怠つた結果は、女子の衛生、教育、修養等の方面は勿論、婦人問題にも影響を及ぼして、其の進歩を遅らした傾きがある。新渡部博士が大正六年五月に刊行せられた、「婦人に勸めて」といへる修養の本は、中判四百二十九頁の冊子

で、評判が良く、餘程賣れたといふ話だが、中を披いて見ると、主に中年の婦人及び結婚後の婦人に就いて、其の心得となるべきことを説いて、處女に關することは全四十六章の中唯だ一節しか見當たらぬ。勿論、婦人といふもの、中には、少女も、處女も中年婦人も、又は老婆も含まれてある譯だから、別々に論じたのでないのかも知れぬが、併したゞ一章だけ、特別「處女時代とは何ぞ」といふ見出しを出してあるところを見ると、矢張處女時代を特別なものと、認められたに違ひないが、それを讀んで見ると、極めて簡單で、處女とは如何なるものであるかさへ明らかでない。恐らく博士は、處女とは何ういふものであるか、其の特徴を知らない譯ではあるまいが、苟にも婦人の修養といふ以上、婦人一生の中で、最も重大な關係を有する此の處女期時代を、等閑に附する謂はれない理である。それを四百頁以上の冊子の中に、僅か九頁を塞いで居るのは、ホンの申譯に過ぎない。予の考へでは、婦人の修養として、處女に誨ゆべきこと、諭すべきこと、又は注意すべきこと等頗る多

くして、それが而かも婦人の、根本的修養となるのであるから、他の些細なことよりも、寧ろ此の方面に、重きを置かねばならぬ筈である。それを一切略してあるのは、何う見ても處女といふものを、没却した仕方としか思はれぬ。

他の婦人修養書、又は教育書を見ても、恚ういふ傾向が多くあつて、處女の研究から出發したものは少ない。特に婦人問題に就いては、殆んど處女を度外視して居る。これ婦人の根本を忘れたものではなからうか。婦人は小兒から一足飛びに、女となられるものでない。處女は小兒と婦人との間に挟まつた特別の女で、之れを小兒と見るのも、又普通の女と看做すのも、共に大なる誤りである。その誤りを正して、處女の處女たる本性、本質を明らかにするには、必らず科學的に研究を試みなくてはならぬ。

第一 處女の生理的及び病理的 方面に關して

一 美妙にして而かも危険多き破瓜期

1 【破瓜期とは何ぞ】

處女といふことが、既に詩的にして、優美の趣きのあることは、前に述べた如くであるが、此の處女と歩調を一にする破瓜期も、詩的で人生の春に喩へられ、或ひは花になぞらへて居る。これ破瓜期は長閑なる春の如く、人生の最も趣味に富める時期なるからである。又破瓜期を花に比するのは、人生の中最も美しい時代なるからである。

斯くの如く破瓜期は、恰も花咲く春の頃の時代であるからして、之れを春機發動

美妙にして而かも危険多き破瓜期

期ともいへば、戀愛期ともいつて居る。其の他春思期、天癸期等種々の名のあるのは、みなそれ々の意味を有するからである。先づ此のことからして、説述して見やう。

妙齡になつて、生殖機能の開始せらるゝ時期となれば、春機發動して異性に對する、愛情を發生するものである。此の愛情は、性の上に来たる自然の、發動であつて、文學者は之れを戀愛と名づけて居る。之れと同時に初經が開通して、身體及び精神にも大なる變動を來たし斯くして、無邪氣であつた幼女が、婦人の仲間入りをするのである。此れ等の特徴に依つて、前に言つた種々の名稱を附けたのである。

斯くの如く幼女から、婦人となるに就いて、其の身體上及び精神上に來たる變化のことは、追々に述ぶるとして、茲に、大體のことを一言すると、身體上にては皮膚、頭髮の愈々美しくなること、乳房の肥大すること、臀部の豊隆となること等で、精神上では、羞恥心の生ずることである。又感情的となつて、心の變化し易くなる

のも、此の時期である。それ故破瓜期には、他よりの誘惑せらるゝことが多くある。

2 【婦人の出發點としての處女】

前に處女は、婦人の出發點であることを言つたが、茲に少しく之れを詳述しなくてはならぬ。婦人の一生中には、處女の時代もあれば、主婦の時代又は母の時代もあつて、其の家庭及び社會に於ける待遇を異にして居るのは、面白いことである。同じ婦人にあつて、簡様に名稱を異にするのは、取りも直さず、性的生活の關係より來たるもので、未だ性的生活に觸れない時期が、即ち處女であることは、既に説いた如くである。それから主婦は、人の妻となれる時期で、生殖機能を完ふすれば、母となるのである。

斯くの如く婦人は、處女、主婦及び母の三時期を経過して、老年となるのであるが、婦人の幸不幸の分かれ目は、最初の處女時代で、最も大切である。何となれば

すべての女は、此の時代に確乎しなければ、女の福を取り逃がして了うからである。語を換へて之れを言へば、處女時代は、女の運命の定まるときなるからである。處女を女の世に出づる出發點と言つたのは、寔に所以あることである。

試みに見よ。女が結婚して、良配を得ると得ざるとは、處女時代にあるではないか。何うすれば良偶が得られ、何うすれば不遇を歎つであらうか。處女が他日世に出づる準備として、教育なり、藝術なり、將又家事經濟なり、女一通りの道を修めて、多く異性の注意を惹くときは、自然良偶が得られるけれども、否らざる者は、良配を得ることが難い。

尙、處女が異性の目を惹くに就いては、精神的修養以外に、身體的修飾と愛嬌とが、與つて大なる力となることを忘れてはならぬ。身體的修飾とは、身たしなみのことであつて、婦人に缺くべからざるものであるが、特に處女には大切である。容貌の美醜は、生來で如何ともすることは出来ぬけれども、身たしなみと愛嬌とに依

つて、素地より幾層倍も美しく、随つて品位も高く見せることが、必らずしも不可能でない。

世の中には先天の麗質でありながら、良縁のない者もあれば、さ程美しくもないのに良偶を得て幸福に暮らして居る者もある。此れ等は謂はゆる人の運不運で、測るべからざるものであるが、併し一つは身の嗜みと、愛嬌とに依つて、其の幸運を獲得することが出来る。之れを詳しく言へば、嫁入り前の處女は、恰も店頭の人形同様で、之れに美しい衣裳を着せ、立派な箱に入れて、飾つて置けば、自然上流の家に買ひ取られて、令嬢達に愛玩せらるゝけれども、粗末な衣裳を着せられて、頭店に晒らして置かるゝ人形は、上等客の顧みるところとならぬ。

處女も是れと同じく、美服を纏ひ、裝飾を施して人の目に立てば、良縁は期せずして來たることに疑ひがない。教育や、學問や、藝術や、其の他精神的修養も缺くべからざること言ふまでもないが、早く良配偶を得る捷徑としては、外部の美的

形容である。次ぎは愛嬌で、人をチャームするといふところまでは行かぬとも、人を喜ばしめ、人の心を引き附くる力がなければならぬ。此の力は即ち愛嬌で、愛嬌のよい者は、多く人に好かるゝこと言ふまでもない。愛嬌は何人にも必要であるが、特に嫁入前の處女は、愛嬌に富まなければならぬ。

筒様に處女は賣り物であるから、之れを十分に磨き上げると同時に、愛嬌を良くすることを努めなくてはならぬ。婦人の幸運と薄幸との岐かれ目の、此の處女期時代にあることは右の事實にて推知することが出来る。

3 【破瓜期に於ける處女の身體的變化】

破瓜期の意義は、前に一言した如くであるが、尙、これに就いては、縷々語るべき特徴が多くある。其の一は身體上に現はるゝ變化、他は精神上的の變革にして、頗る趣味のあるものである。先づ身體の變化より言つて見やう。

女兒が破瓜期に近づいて來ると、新陳代謝の機能が旺盛になつて、大食もすれば運動も活潑になる。其の結果として身長も伸びれば、體量も増加して、漸々に娘らしくなるのである。斯くして破瓜期に達すると、身體が全く一變して、小兒おしかつた姿が、娘の姿となるのである。

如何なる理由で、破瓜期になると、筒様に身體が變はるかといふに、これは生殖器の成熟して、内分泌作用の行はるゝ影響である。内分泌作用とは、生殖腺(卵巢)より、卵子以外に内生する物質に依りて、身體機能に活氣活動を與ふことを謂ふのである。此の内生物質は、オーフオリン Oopholin と稱する化學物質であつて、これが血液に混じ、全身を循環すると、婦人として必要な特徴の器官が、其の場所／＼に於いて發生、或ひは發達し、他の一は腦を刺戟して、戀愛的情緒を生ずるのである。此の内分泌は、極めて面白く、且つ重要なもので、予は既に之れを拙者『性慾に關して青年男女に答ふる書』の中に詳述してある。詳しく此のことを知ら

んと欲する方は、該書を參看せらるゝがよい。

一言にして之れを蔽へば、破瓜期に於ける、一切の變化といふものは、内分泌作用の營むところである。今、處女に於ける其の身體的變化を列擧して見ると、身長及び體量の増加と、生殖器の發達との外に、次ぎの如き現象がある。即ち、脂肪の増加して、肥えること、脂腺の發達して、顔にニキビを生ずる者のあること、皮膚の理細かにして、艶麗を増すこと、頭髮の長く、且つ光澤を増すこと、音聲の清く且つ高くなること、體臭の烈しくなること、乳房の肥大すること、及び臀部の豐隆となること等は、外部に現はるゝ變化で、何人にも了知せらるゝが、生理的に體內に起こる變化は、消化、吸収及び排泄諸作用の盛んになること、呼吸活潑にして炭酸瓦斯の排出増加すること、血管大となり、循環能くなること、尿量多くなること、睡眠深くなること、及び腦量大となること、等である。

如上の變化は、すべてみな内分泌作用、即ちオーフオリンの發生に依つて起こ

るものであるが、オーフオリンは卵巢より生ずるもので、卵巢が成熟しなければ、起こることはない。故にオーフオリンは生殖器の發達と、密接なる關係がある許りでなく、破瓜期に於ける身心の變化は、すべて生殖器の發達より、導びかれたるものと謂ふを妨げぬ。生殖器官の人體に及ぼす影響の、甚大なることは此の一事にても了解せらるゝであらう。

破瓜期に於ける變化が、筒様に生殖器官を中心として起こるので、此れ等の變化を、セキジュアル、チャアンチ Sexual change (性的變化) と名づけて居る。然るに面白いことは、此のセキジュアル、チャアンチが、處女にあつては、時として逆行することである。例へば肌の理細かく、軟かにして美しきこと、音聲の清く澄みて、優しきが如きこれである。

逆行とは退化の意味である。原始的の狀態に止まつて、其の儘發達しないのである。破瓜期に至つて、オーフオリンが性的器官、及び其の他諸器官の、發達を促す

場合に、獨り原始的に止まつて、其の儘で居るものがあるといへば、これにはオーフォリンが、作用しないやうに聞こえるが、其の實はさにあらずして、オーフォリンが此れ等の器官に向つて、特別の發達を促したのである。

それは即ち處女の皮膚と、音聲とで、處女の皮膚は、小兒時代の皮膚其の儘で男の如く強固にはならぬけれども、オーフォリンが益々之れに、艶麗なる色彩を與へるのである。箇様に艶麗となれるところへもつて來て、皮下に脂肪が蓄積する結果、一層の美を増して、謂はゆる曲線美を發揮するのである。音聲も之れと同じく處女の音聲は、小兒時代の音聲と變はりが無いが、オーフォリンの作用に依つて、一層清く、澄める音聲となりて、歌を歌へば、さながら鈴を轉がすといふやうな、美妙的な聲となるのである。

箇様に處女の皮膚と、音聲とは、逆行的變化を來たすので、之れをオーフォリンの消極的、即ち停止作用と謂ふことが出来る。然るに乳房、臀部、頭髮等は、オ

ーフォリンの積極的、即ち建設的作用に依つて、發達するので、小兒の時とは、全く異なつて來る。今まで固く結んで、解けなかつた花蕾が、東風に暖を送られて漸々に綻び初むるが如く、日一日と芳を加へ、美を増して來るのである。斯くしてあどけなき少女が、肉色艶麗、嬌姿の清楚たる處女となること、恰も蛹の稚衣を脱したる、蝴蝶の如くなるのである。

4 【破瓜期に於ける處女の精神的變化】

精神上的の變化に於いても、注意すべきことが多くある。其の主なるものは、戀愛及び性慾の發動、羞恥心の發生、及び感情の變じ易くなること等で、其の他は附加雷同心、猜忌嫉妬心及び虛榮心等であるが、此れ等精神的の變化は、戀愛を中心として起るのである。

さて戀愛の情は、内分泌に依りてオーフォリンが、腦を刺戟して、生ずるものな

美妙にして而かも危険多き破瓜期

ることは、前に述べた如くで、破瓜期より始まるものである。併し此の時代に於ける戀情は、極めて高潔、且つ淡泊にして、單に異性の容姿、又は性格等の或る美點に牽引せらる、感奮的情緒に過ぎないのである。語を換へて之れを言へば、或る人に對する、愛の極致にして、其の人が異性である場合には、戀愛となり、同性であるときは、單純なる愛情となるのである。

これ故に戀愛と、愛情との別は、異性と同性とに依つて生ずるのであるが、併し戀愛は必らずしも、異性のみならず、往々同性に對しても、其の愛情の濃密になるときは、戀愛に變ずることがある。謂はゆる同性愛であつて、異性に對すると同様なる愛情を同性に濺ぐのである。此の同性愛は男性間にもあるが、割合から言ふと女性間の方に多く、而かもそれが、破瓜期時代に於ける處女に、最も多くあることを忘れてはならぬ。

如上同性愛にしる、異性愛にしる、處女期時代に於ける戀愛は、全く精神的にし

て、肉的にはならぬけれども、破瓜期の後期に達して、生殖器が完熟するに至れば肉的色彩を加味して、そこに性的感情を生ずるのである。これが即ち性慾で、戀愛の性的に變じたものであるが、其の根原は全く生殖器の成熟にあるのである。

戀愛及び性慾の發動と同時に、起こるものは羞恥心で、それより處女の動作の、一變するに至ることは、注意せざるべからざるところである。無邪氣で、稚心に満ちてあつた女兒の、舉止動作が、すべて靜肅溫和となり、人に對して恥かむ情の著しくなつて、環境に心を配するやうになるのは、羞恥心の發達より來たれる、精神的變化といふべきである。

是れに就いて、茲に一言斷はつて置かねばならぬことがある。それは幼女の羞恥心で、面識の無い人に逢ふと、顔を下に向けて、其の視線を避けやうとする。これは確かに羞恥心であるが、その情は簡單で、小さい心と、人を怖れるといふことから、起こつて居る。然るに妙齡の處女に於ける羞恥心は、性的色彩を帯びて、小

い心で、自己の缺陷を、發見せられて、笑はれはしまいかと思ふ情を含むのである。故に其の己れに對する人が、若しも我が心裡で愛し、或ひは戀ひして居る者であつた場合には、一層羞恥の感情が嵩まつて來る。處女が若い男に逢つただけで、顔に紅葉を散らすといふのが、全くこれが爲めである。況してや言葉をかけらるゝやうなことがあると、愈々恥かんで顔が火のやうになる。此の嬌態は、羞恥心には違ひないが、性的感情が附帶して居るので、之れを嬌羞と名づけるのが適當である。嬌羞は英語の Coyness に相當する語で、前に言つた羞恥心、即ちシャイネスとは異なる。シャイネス Shyness とは、内氣と譯して、性には關係なく、單に人前を、恥づるものであるが、コイネスは異性に對して、恥づかしがるのである。羞恥心の消失した者は、賣笑婦の類で、普通の女子でも、中年以後になれば、漸々此の心が薄くなつて、夫や愛人に厭はるゝやうになることが多い。處女の崇高優美にして、異性に愛せられ、好かるゝのは、全たく此の嬌羞的情操がある爲めである。

ある。であるから婦人といふものは、處女ばかりでなく、新婦になつても、主婦になつても、此の嬌羞的情操の保持が必要で、之れを失はないやうにしたいものである。

斯くの如く嬌羞は、性的色彩の加味したもので、それが處女から始まるのであるが、併しこれに不平、憤懣等の感情が加はると、猜忌嫉妬となり、怨恨憤怒となつて、相手を呪ひ、或ひは之れを傷つくるといふやうな、狂的行爲に陥ることがある。虚榮心も畢竟は、性慾の影響であつて、一般の婦人に富んで居るが、特に破瓜期時代の處女に盛んである。此の心の嵩じたものは、嬌羞心を破壊して、自負、自尊となり、而してそれが理性の乏しい者であると、竊盜、萬引、甚はだしきは強盜などを働くに至ることがある。嘗つて都下に、十七或の娘強盜があつて、世人を驚ろかしたことがある。これは全く虚榮の使曠に出たものであつて、其の裏面には性慾の含んで居ることが知られた。

5 【破瓜期に於ける處女の危険】

前條に一言した娘強盜のことは、各新聞にも出て、人のみな知るところであるがこれは破瓜期時代に於ける、處女の危険を、代表したものと謂ふべきである。勿論斯かることは、姫ごせのあられもないことで、一般の例とするのではないが、併し強盜でなくとも、強盜に類した行爲の者、或ひは之れに近い行爲の者は、決して乏しくない。特に憂ふべきは、此の時代に他の誘惑に逢ひて、身を誤る者の甚はだ多くあることである。娘強盜の如きは稀有であるとしても、誘惑から墮落して、賣笑婦になる者や、浮浪する者や、或ひは犯罪者となる者等の、甚はだ多きことを思へば、破瓜期時代に於ける處女の危険は、想像より以上大であることが了かる。何故に破瓜期に於ける處女が、斯くの如く罪惡に囚はれ易きかといふに、これに二つの原因がある。第一は腦力が未熟にして、思慮分別の足らざること、第二は諸

々の誘惑に對する抵抗力の、薄弱なること之れである。要するに腦の發達が、身體及び生殖器官の發達に比して、遅れて居る結果である。

是れは處女に對して、最も重要なことであるから、少しく詳述して見やう。女子といふものは、元來早熟、早成なるもので、破瓜期の頃に至ると、體格の上に於いては、女としての一人前となるので、早く人の目につく。恰も花に蟲が集まるやうに、不良少年や、惡漢等が簇つて來る。そうして之れを手折つて見やうと思ふものや、之れを誘拐しやうとする者などが、多く出て來る。彼れ等は間がな隙がな、巧言令色をもつて誘ひ出すのであるが、併し處女は、之れを彼れ等が、玩弄の爲めとも、誘惑の手段とも、分別が附かないから、其の口車に乗せられて、墮落の淵に沈むのである。

此れ等はすべて、環境より來たる危険で、之れを類別すると、

一 社會の華美なる、誘惑より來たるもの、

美妙にして而かも危険多き破瓜期

二 交友の悪感化より來たるもの、
 三 紊亂したる家庭の、悪影響より來たるもの、
 となる。此の中一は、虚榮心の強い處女などが罹かり易く、二は意志の薄弱なる者或ひは輕率なる娘などの、蒙むり易き害である。三は家庭の躰けを見習ふて、自然それに感化する者で、最も重大なるものである。彼の紊亂せる家庭に、育つた小兒から、不良少年又は少女の多く出るのは、事實の證するところである。尙、環境の外には、精神的内界より起こる、危険もある。先づ其の種類を擧げて見ると、

- 一 遺博素質より生ずるもの、
- 二 疾病より起こるもの、
- 三 感情の亢奮より發するもの、
- 四 思慮、分別の淺薄より來たるもの、

五 性的本能の、衝動する起こるもの、
 等となるが、處女を危険に導びくには、外圍よりも寧しる此の方が、重大である。特に著しきものは、一の遺傳的傾向を帶ぶるもので、二の病的なるものも少なくな。三の感情の亢奮より、生ずるものは、嫉妬、怨恨等であつて、犯罪の原因となることは、前に述べた如くである。四は腦力の未熟と、無經驗とより來たるもので處女には免るべからざるところのものである。最後の五は、生理的本能で、戀愛となり、性慾となる。而して正しく其の道を履んで、良配偶を得るときは、幸福を來たして、圓滿に生活することを得るけれども、之れと反して、其の道を誤るときは、野合となり、淫奔となりて、其の身に禍ひを來たすこと、重ねて言ふまでもない。

破瓜期時代に於ける處女は、如上の事實に依りて、其の身を誤ることが多い。語を換へて之れを言へば、破瓜期は、身體の變化に伴ふて生ずる精神的變化、即ち

身心の急劇なる變はり目に、屬する時なるからである。而して身體的變化の方では主に生殖器の發達と、性慾の發動とで、それが時とすると、生理的から病的に變ずることが多くある。處女時代に多くある比斯的里は、箇様にして起こるのである。

二 破瓜期を意味する初經

1 【月經とは何ぞ】

破瓜期には種々の特徴のあること、前に説述した如くであるが、其の中にて最も確實に、破瓜期を意味するものは、初經、即ち月經の初潮である。何となれば處女の、破瓜期に入りたる徴候として、必らず天華の潮來を來たすからで、初經と破瓜期とは一致して居る。それで月經とは一體如何なるものであるか、又、如何なる理由にて、破瓜期から始まるものであるか、これは婦人に於ける自然の妙機にして

深い深い意味の存するものなるに依り、破瓜期を知るには、月經を説明しなくてはならぬ。

併し月經の定義は、簡單である。これ一定の年齢に達したる處女が、生殖機能の開始したる徴候として、血液を生殖管より、排泄する現象を謂ふのである。此の現象は、男子には無くして、獨り女子の特有に屬して居るのは、其の生殖機能が、男子と異なる爲めである。注意すべきことは、一度初經を來たして、天華が開通するときは、爾來週期的となつて、毎月定期に、來潮することである。英語で之れをムーンストリー、ヂスチャージと Monthly discharge (月々の排泄) と名づけて居るのは之れが爲めである。

併し此の月經現象は、身體及び生殖器官の、健全な婦人に限つて、正確に行はるゝけれども、身體に缺損のあるもの、又は生殖器に異常のある者等に於いては、不正確を來たすことが多く、時としては全く月經の無いこともある。

破瓜期を意味する初經

斯くの如く月經の正確にして、周期性なるものは、卵巢の發育が完全にして、毎月定期に反覆するところの、グラーフ氏胞の破裂に依つて起こるのである。其の來潮期は普通に、四週間即ち二十八日目毎で、順潮なるものは其の時が來ると、期日を違はず必らず來潮するのである。

箇様に月經は、週期的に來潮するもので、其の作用は生理的であるけれども、この現象ほど奇異なる、而かも詩的なるものはない。それで月經は古昔より、人に注意せられたもので、特に野蠻時代には、之れを惡魔の所爲、又は邪氣の發散など、稱へて恐れ、或ひは忌んだのである。併し妙齡の處女が、一人前の女となるに就いて、初めて現はる、此の月經が、如何にも美妙であるからして、古人は之れに天華天癸、天經、又は月華、月信、月事、月水などと稱へて、詩美化するやうになつたのである。

2 【初經の徵候】

破瓜期の代表的現象なる初經は、生殖機能の開始と看做して、結婚に差し支へなき身となつたのであることは、前述の事實に依つて知らるゝ。併し月經は初經にして、將又定期的に來潮するものにしる、突然に發するものではなく、數日前よりして、徵候があるので、之れを前知することが出来る。併し初經の場合には、未だ經驗がないから、之れを無知無覺に經過することが多い。それで年頃の娘に對しては、其の母親からして之れに對する用意を、知らして置くことが必要である。

先づ一般的に、月經の前兆を列擧すると、何となく頭重く、或ひは頭痛を感ずることがある。食思が稍々不進となり、下腹と薦骨部に、一種の疼痛を覺ゆることが多くある。又、下肢が倦怠くなり、時としてはそれが全身に及ぼすこともある。其の結果として何事を爲すにも、懶くなり、時としては衄血を來たすこともある。

其の他の徴候としては、睡眠の常よりも深くなること、尿量の増加して、度数の多くなること、呼吸及び脈搏の稍々緩慢となること、甲状腺が膨れて、頸の周囲の太くなること等で、最も著しいものは、神経系の亢奮して、精神の不安となること時としては感覺器に異常を來たして、錯誤に陥ることの多くあること等で、神経系の亢奮は、すべての婦人を通して、免れざるところである。

勿論、月經の徴候は、人に依つて一様でないが、大體に於いて一致して居るのは前に言へる神経系の亢奮することを除いては、頭の重くなること、下腹、又は薦骨部の痛むこと等にして、軽い者は其の徴候を自覺せず、經過することもあるが、重い者になると、其の徴候が病的に變じて、懊惱することがある。初經の際に斯かる種の者を、其の儘放棄して置くときは、愈々劇烈となつて、遂には月經異常となることがある。

注意すべきことは、此れ等徴候の現はるゝ時期である。大抵は來潮の二三日前よ

り、催すものであるが、時としては一週間前、若しくは十日も前から、現はるゝこともある。初經にあつては二週間前、或ひは一ヶ月前から、身體に違和を來たすものであるけれども、それと心附くことが少ないから、感冒でも引きやしないかと思ふ者が多くある。

それで多くの處女の中には、違和が激甚で、苦惱の大なるものでなければ、氣にも止めないで居ると、突然に經血が來潮して、驚愕することがある。大抵の處女は恚ういふ不意の出來事に、出會するものである。併し一度經驗すれば、次ぎの月經から狼狽することが無くなる。

3 【初經の來潮する年齢、其の遲速の利害及び

之れに對する注意】

さて初經の來潮時期は、人種、氣候、風俗、習慣及び生活狀態等に依つて、一様

でないが、其の遅速は教育、結婚及び職業等の上に、大なる關係があるので、何人も之れを知り置くことが必要である。先づ人種の上から言ふと、歐洲人は黒人よりも早く、日本人はアイヌ人よりも早くある。

筒様に人種に依つて、初經に遅速のあるのは、月經が、文明に進むほど早く來たり、野蠻人は遅れて居る爲めである。是れに依つて之れを観れば、月經は人類の進化を現はせる、一の表彰であつて、野蠻人の月經は、其の時期も短く、概ね一日で終はり、其の血量の如きも、極めて少なくある。此の點は獸類に似て、動物中月經を有するものは、一も之れなく、唯僅かに高等猿類に、之れに似たる現象を見るのみである。野蠻人の月經の、完全でないのは、此の理由にて、推知することが出来る。

次に氣候の上より言へば、熱國の人は寒國の人よりも、初經の到來すること早く、其の他の點に於いては、教育のあるものは、教育のない者より早く、豊かなる生

活を爲す者は、貧しき者よりも早い。生活状態に於いては、嚴格なる家庭に育つ者は、淫靡なる職業に従事する家に育つ者よりも遅い傾きがある。これ月經は、生殖機能と密接なる關係を有して、早く性的生活に觸れる者は、早く月經を促すからである。熱國にて早く初經の來たるのも、高き氣温が早く生殖機能を、成熟せしむる故である。

筒様に初經は、種々の事情に依つて一樣でないが、我が國の例に依ると、東京では十四年七ヶ月、大阪では十四年九ヶ月、北陸では十四年九ヶ月、四國では十四年九ヶ月、九州では十四年十一ヶ月で、これはみな平均數である。更に之れが總體の平均を採つて見ると、十四年九ヶ月となる。

是れに依ると、日本中で初經の最も早いところは東京で、一般に關東地方は早くある。之れに次ぐは大阪、北陸及び四國で、最も遅いところは、琉球の十六年一ヶ月と、臺灣の十六年二ヶ月とである。これ人種的差異と、文化の低い影響との、然

らしむるところと看るべきである。

斯くの如く初經は、人に依つて早いものと、遅いものとあるが、此の遅速は、處女の身體及び精神に、大なる影響を及ぼすものである。語を換へて之れを言へば、初經の早く到る者は、早く身心の成熟せる徴候にして、色情を覺ゆること早く、之れに反して初經の遅き者は、身心の熟すること遅く、随つて色慾を解することも遅くある。故に初經の早い者は、早く物心が附きて、危険なる時期（破瓜期）を長くして、之れに陥る恐れがあるに依り、十分注意しなければならぬ。

又、一方から言ふと、生殖器官の發達は、元來は身體の發達に、併行すべきものであるから、身體の未だ十分に發達せざる中に、生殖器官の之れに先んじて成熟するのは、自心の發育を妨ぐる原因となるに依り、幼少の時代に、早く初經の到來する者は、一般に心の發達を、害する恐れがある。印度、亞良比亞其の他熱帶地方に於ける女子の、一般に早く老衰するのは、此の理に因るのである。

初經の早いものと、遅いものとは、人力に依つて如何ともすることが出來ぬけれども、處女に早く性的生活に、觸るゝ機會を與ふことは、害ありて益のないことは前に言つた如くである。之れに依り色情は、成るべく身體の成熟して、身心の健全に發達したのちに、發動せしむるやうにすることが必要である。之れを要するに早期に於ける色情の發動は、早く初經の來潮を促し、其の結果悪しき習慣に染み、或ひは淫靡の風に陥ることが多くあるに依り、子女を有する父母は、此の點に關して、注意するところなくてはならぬ。之れに依り初經に關して、茲に其の注意すべき要點を附記すれば、次ぎの如くである。

一 妙齡の處女には、初經の前兆があるか無いかを注意して、之れに對する用意を、知らしめ置くことを忘れてはならぬ。

二 此の注意を與ふる者は、家庭に於いては、母親或ひは姉の任務とし、學校にては校醫、又は女教員等が、之れに對する用意を教へて、來潮したとき

に狼狽しないやうに心得させなくてはならぬ。

- 三 それで來潮した場合には、完全なる手當を施し、決して不潔なる紙片、或ひは襪縷等を用ひざることを、且つ粗暴に取扱はざること等を、自覺せしめなくてはならぬ。

- 四 精神は最も安靜に保ち、力めて感動を去り、入浴、運動等も避けせしめなくてはならぬ。

- 五 症候の激烈にして、大なる疼痛を伴ひ、その他異常のある場合には、猶豫なく専門醫に診て貰はなくしてはならぬ。

三 法醫學及び美術問題として處女の鑑定

1 【二少女の例】

結婚の場合を除く外は、普通に於いて處女と、非處女とを鑑別する必要はないが

時としては法醫學の方面から、其の必要の起ることがある。例へば密賣淫の嫌疑を受けて、檢舉せられた女が、處女であると主張するときの如きで、然るときは果たしてそれが、處女であるか否やを確めなくてはならぬ。日本では餘り聞かぬが、外國にはよくあることで、密賣淫婦が法廷を煩はすことが多くある。之れに關して佛蘭西の有名なる賣淫學者、ボーロン、ヅウ、シャテレー Parent-Duchâtellet氏は、其の著書に、次ぎの如き例を示した。

二人の少女があつた。密賣淫の出訴を受けて、檢舉されたが、二人とも共に處女なりと主張して、検査を受けんことを請求した。そこで官は或る經驗ある醫師に命じて、検査せしめたけれども、之れを判定することが出来なかつた、といふのは二女とも處女らしかつたからである。それで放免せられたが、其の後に至り此の二少女は、久しく賣淫を業とし、而かも微毒に罹かりたることさへあつたことが、知れたといふことである。

又、他の一例は、五十一歳の婦人で、十五の時から、賣淫を業として来たけれども、容貌は若く、身體は殆んど妙齡の處女の如くであつたといふ。

次にジャックモン Jacquemin 氏も、十年若しくは十二三年間、都市にあつて、常に處女を装へる、多くの賣淫婦を知れりといふことである。

素人の女ならばまだしも、賣淫婦が處女を装ふといふに至ては、全く奇蹟である。何故といふに、女子は異性に接すると、必らず身體に、或る變化を來たすからである。それで其の變化を検すれば、處女と非處女との區別が、全く明らかに分かるのであるが、併し女に依つては、先天に其の變化の、現はれないで、何時までも處女の如くなる者がある。さういふ女子は、賣淫婦でありながら、處女を装ふて、人を瞞着することが出来る。して見ると奇蹟でも何でもないが、法醫學上の問題としては、輕々に看過することが出来ないのである。

尙、處女と非處女との區別は、美術家がモデルを選定して、之れを採用する等の際にも必要である。處女を描かんとして、採用したモデルが、若しも處女でなかつた場合には、如何に筆が巧妙であつても、モデル其の者の身體が、處女でないから不恰好の繪が出来る譯である。それが爲めに折角出来上つた繪を、あとで破棄して了はなければ、ならないやうなことがある。實際さういふ例が、少なからずあるがそれは後文に示すことにする。

箇様に處女と、非處女とを、鑑定しなくてはならぬ場合が多くあつて、此の鑑定は決して、娛樂的のものでない。何人も一應は、知つて置く必要がある。それで處女が性交に依りて、起こる身體的變化の、如何なるものなるかを、予は特に裁判官警察官及び美術家等の爲めに、説述して、其の参考に資せんと欲するのである。

2 【身體上の退行變化】

處女の性交に依りて起こる、身體上の變化に種々あるが、其の主要なるものは、

破瓜期を意味する初經

第一に生殖器官の變化、第二には乳房の變化、第三には臀部の變化、次ぎは頬の變化、及び喉頭の變化等で、著しきものと、著しくないものとあるが、生理的影響として、其の變化は必ず免れないのである。此れ等の變化は、美容と關係して、美術上重大の關係を有するに依り、詳細のことは第二編に譲り、茲には主として生殖器官の變化に止めて置く。

さて、生殖器官の上に現はるゝ變化は、最も著しき退行的のものである。即ち處女膜の破裂、大陰唇の弛緩、腺粘膜に於ける横皺襞の消滅、及び色素の沈澱等であるが、此の中重要なものは、處女膜の破裂である。

一體、處女膜なるものは、處女に特有なる一種の贅器官にして、祖先が之れをもつて、處女の操を保護する用に供したる、或る器官の遺物と、看做すべきものである。其の質は、肉質の薄膜にして、中央に小孔を有し、さうして腔口を掩ふて居るので、之れを破壊しなければ、満足に性交を行ふことが出来ないのである。

併し時としては、結婚前に處女膜の破裂することがないでもない。例へば外傷、疾患、或ひは月經に對する不當の手當、若しくは自瀆等の爲めに、生ずる破裂で、就中月經より來たる破裂は、多くあるけれども、大多數は結婚に依つて、破壊するものである。故に處女膜の完全して居る者は、處女と看做すことが出来るけれども人に依つては處女膜の厚く、而かも孔が大にして、伸縮性に富めるものがある。斯かる者は、其の處女と非處女とを鑑別することが困難にして、前にデュシヤテレー氏が示したやうな、處女的賣淫婦が出るのである。併しながら身體上には、確實なる變化が認められないとしても、血清の上に或る變化があつて、之れを鑑査するときは、處女と非處女との區別が、明瞭に出来るのである。それは何であるかといふに、性交より生ずる化學的反應で、ワルドスタイン及びエーケレル兩氏の創見である。

3 【性交反應】

奥國維納の醫者ワルドスタイン Waldstein 及びエーケレル Ecker 兩氏の發見にかゝれる性交反應のことは、「性欲に關して青年男女に答ふる書」の中に、詳述してあるから、茲には簡單に其の要旨を記して置く。

兩氏の説に依れば、子宮又は喇叭管に進入したる精子は、其所の粘膜を穿通して、組織より血管内に竄入するに依り、其の血液中に、異性の精子に對する、一種の醱素を生ずるのである。而して一たび醱素の生ずるときは、常に同一の反應を呈するけれども、異種の精子なるときは、異なる反應を起こすに依り、此の事實をもつて、正確に處女と非處女との區別は勿論、姦通等の場合にも、之れをもつて鑑定することが出来る。

四 處女の罹かり易き疾患

1 【破瓜病】

婦人には破瓜病といつて、特に處女の際に多く發する疾患がある。即ち萎黃病、遺傳病及び初經性精神病等の如きこれで、中年以後にも起こることがあるけれども主として妙齡の處女を襲ふものである。

A 萎黃病

萎黃病はクロ、シス Chlorosis 又はプレヒスヒト Die Bleichsucht と名づけて、歐洲に多くある病氣である。日本人には少ないから、知られてないが、歐洲では處女の固有病と言はれて居る。其の起こる時期は、大抵十四五歳から、二十四五歳の間にして、其の原因は、初經に際して、初めて多量の赤血球を失ふこと、コルセット

を用ひて、血液の循環を妨ぐることに、精神の不安、過勞より來たる衰弱、營養不良より來たる貧血等であつて、赤血球の不足が、主なる原因である。

此の原因から考へて見ると、我が國の少女にも、多くなくてははらぬ理だが、其の稀有なのは、コルセットを用ひないのと、今一つは、人種的關係とである。併し上流社會の令嬢、或ひは深窓の娘などで、運動することなく、且つ厚い帶や、紐等をもつて、胸や腹を堅縛する者には、此の萎黃病に侵さるゝことがある。

B 遺 傳 病

遺傳病とは、父母又は祖先の遺傳病性疾、又は其の素質等を享受して、發現する疾患の謂ひである。故に父母及び祖先に、遺傳性の疾病を有せざる者は、之れに罹かることはないけれども、父母にさういふ疾患のあるものであると、それが破瓜期に至つて、發現するのである。これ破瓜期は身體の變革する時期で、丁度春になると、雜草が到るところに萌發して來る如く、破瓜期には遺傳病其の他の疾病が、極

めて起こり易くある。

遺傳病には多くの種類があつて、一々枚舉に遑ないが、其の中で著しいものは遺傳性の近視眼、肺結核、精神病等で、氣質なども遺傳素質のあるものは、此の時期より著しくなつて來る。それで近視眼や、肺結核等の素質があつて、之れに罹かるとすれば、破瓜期の頃から、萌芽を現はし、さうして一二年を経過すると、症候が判然と現はれて來るのである。恚ういふことは、處女は勿論、父母の心得て置くべきことで、此の時代に十分攝養すれば、其の病を免るゝことが出来る。

C 脊 柱 彎 曲 症

もう一つ、破瓜期によく發する疾患は、脊柱彎曲症といつて、脊柱の屈曲する疾患である。本症は女子特に處女の固有病であつて、十三四歳から十六七歳の間に多くある。エウレンベルグ Eulenburg 氏は、脊柱彎曲症の患者三百人を調査したところ、其の中二百六十一人は女子で、二十九人は男子であることを知つた。ギローム

Guillaume 氏も、脊柱彎曲症患者は二百十八人の内、百五十六人は女子で、六十二人は男子なることを發見した。

2 【比斯的里及び神經衰弱】

比斯的里及び神經衰弱も、處女の時代より萌發するものにして、漸々に症候を現はして來ると、それが本病となるのである。此の二病は似て非なる疾患で、比斯的里は女子に、神經衰弱は男子に、特有なるものと知られて居るが、併しそれは偏狹なる觀察で、神經衰弱は必らずしも男子に、又、比斯的里は必らずしも女子に、限るに決つて居らぬ。比較的に其の傾向のあることは勿論であるが、比斯的里の往々にして男子に、又、神經衰弱の時として、女子に發生することもある。

何れにしても此の二疾患は、破瓜期時代から始まつて、中年まで續くが、幼年と老年とは稀れである。精神の過勞、營養不良、不規則なる生活、不安、反性的自慰

等で、特に最後のものが、有力なる原因と認められて居る。これ破瓜期時代には、戀愛的色慾の發動が盛んにして、往々反性的行爲に陥ることが多いからである。比斯的里及び神經衰弱の豫防として、反性行爲を警戒することの必要は、予之れを『青年男女に答ふる書』に於いて、説述して置いたから、參考するがよい。

序でだから比斯的里と、神經衰弱との區別を一言しやう。何となれば此の二病は極めて類似せるもので、往々誤認することがあるからである。リヒテル氏の如きも此の二病を同じものとして、たゞ神經衰弱は男性に來たり、比斯的里は女性を犯すものとして、區別した位である。けれども比斯的里と神經衰弱とは、全く別物で、其の重なる要點は、次ぎの如くである。

- 一 比斯的里は概ね突然に發し、神經衰弱は多く徐々に來たる。
- 二 比斯的里患者は、謂はゆる比斯的里性々格を有し、神經衰弱患者は、神經衰弱性々格を有して居る。

三 比斯的里には、子宮痛、卵巢痛等屢々來たり、神經衰弱には稀れにして、且つ弱くある。

四 比斯的里の頑固なるものは、顔面土の如く變じ、殊に前額部に汚斑を現はし、或ひは頭髮の薄くなることなどもあるけれども、神經衰弱には、斯かることがない。

五 比斯的里には神經痛最も多く、重症なるものには、痙攣發作と、身體諸所に痙痺と知覺脫失とある。痙痺は主に四肢、又は半身に發し、知覺脫失は感覺、温覺及び痛覺等を失ひ、四肢、咽喉、生殖器等が、之れに侵さるゝことがあつても、知らないで居ることがある。然るに神經衰弱に於いては簡様なことが稀れである。

六 比斯的里の精神的症候としては、感情の變じ易いことである。即ち喜悲哀樂の變ずること劇烈にして、笑ふかと思へば泣き、泣くかと思へば喜ぶ

の類である。又、我慾的となり、自尊の念強く、怨恨、憤怒、嫉妬等も烈しくして、虚偽の自殺、暴行等を爲すこともある。

尙、比斯的里には、幻覺及び妄想が多くして、膽妄状態となるときは、精神喪失して、無意識に罪惡を犯すこともある。之れを要するに虚言と、佯病とは、比斯的里患者の特有であつて、神經衰弱には、斯かることが尠ない。

右の症候に依るときは、比斯的里と、神經衰弱とを、區別することが容易なるが如くであるけれども、往々兩者の合併することがある。即ち比斯的里性神經衰弱と名づくるものにして、神經衰弱の症狀が増せば、比斯的里症狀も、随つて増加するものである。

3 【處女に來たる精神病】

處女の罹り易き疾患

月經時には、下腹部の臓器に充血を來たして、新陳代謝機能に障礙を與ふる結果、腦及び神經等を刺戟して、精神を不快不安ならしむることは、既に述べたるところに依りて明らかである。月經中、或ひは其の前後に、精神障礙を來たして、狂的狀態となることの多くあるのは、之れが爲めにして、クラフト、エビング氏は、月經と精神病との關係に就き、月經性精神病なる説を唱へて、此の精神病を類別して、初經性精神病、排卵機能性精神病及び週期的月經性精神病的三種と爲した。此の中處女に特發するものは、初經性及精神病であるから、茲には此の説明だけに止めて置く。

初經性精神病は、處女に發する初めての精神病にして、處女性精神病とも名づけて居る。これは初經と共に發するもので、比斯的里と類似し、或ひは之れから眞の比斯的里となることも、往々ある。併し比斯的里に變じなければ、身體の發育が、生殖器の變化に依つて、平均を保つに至れば、自ら消失するものである。其の年齢は

十四歳より、十八歳の間で、此の時期を經過すれば、自然に癒つて了う。

第二 處女の美的方面に關して

一 其の美しき身體

1 【蓮花娘の如く】

春の花に喩へられた處女の身體は、すべて美的形容をもつて形成せられて居る。容貌は勿論のこと、皮膚といひ、風姿といひ、何所一つとして、美の精の籠つて居らぬところがない。早く言へば頭の上から爪の先まで、彼の美神クリシナ Krishna の御心で、蓮花が活ける人に成り變つたといふ、蓮花娘 A Lotus Maiden の如く、地上最美のものである。

併しながら處女の美は、淡泊にしてあどけなきところがある。婀娜濃艶ではない。情味細かではない。たゞ清楚として、無垢純潔なところに、趣きがある。これ未だ性的生活に觸れてない爲めで、飽くまでも美の精化したものと、看なさねばならぬ。

何人も此の感想を失つてはならぬ。處女に對して、其の美を觀賞するのはよいが之れを手折りにて、汚してはならぬ。又、處女も蓮花娘の心意氣になりて、クリシナの言はれた如く、互寒には、春風となつて之れを和らげ、深淵には、眞珠となりて、光り、荒野には、美しき花となりて咲き、暗き洞窟には、赫灼たる光輝となりて、之れを照さなくてはならぬ。これ處女の理想とすべきところである。此の心にて其の身を磨き、其の行ひを修めたならば、優美高尚にして、眞に愛すべきものとなること疑ひがない。

2 【處女の皮膚】

併し美といひ、醜といふも、畢竟は、皮膚の問題に過ぎぬ。處女も、新婦も、主婦も、唯だ皮膚の色に依つて、美人ともなれば、醜婦ともなるのである。其の皮膚一枚にて、億千萬人の容貌が、變はるのであるから、審美學者は此の皮膚を、美の根源と呼び、又、人類學者は之れをもつて、人種の基礎と唱へた。

斯くの如く美の源となり、又、人種の基となるほど、それ程皮膚は、精巧緻密なるものなるかといふに、さにあらずして、唯だ表皮と眞皮とより成り、而して其の下層に、脂肪と筋肉とを、包んで居るのみである。併し皮膚は、此の脂肪と、筋肉と相互に關聯して、體の内外より來たる刺戟に、感應することが最も機微なるが故に、皮膚ほど、身體器官の營養、障礙及び精神作用との影響を、被むり易いものはない。

之れを喰へて言へば、若木と老木とは、其の樹の皮で一目瞭然たるべく、又、病葉は其の色で知らるゝが如く、人間の老若も、健康も、不健康も、皮膚を見れば直ぐに解かる。のみならず其の心の感動も、皮膚に顯はれて、謂はゆる顔が物を言ふといふ如く、皮膚は其の人の心持と、年齢とを語るものと謂ふべきである。

何故に恁んなことを、言ふかと云ふに、處女の緊張して居る皮膚が、少しでも性的生活を營むときは、忽ちに弛緩して、天然の美を失ふからである。元來女は脂肪に富んで、柔軟滑澤であるが、併し一たび性的生活に觸れた者、又は中年以後の婦人になると、皮膚は弛んで、如何に濃艶に装ふても、清楚たる其の曲線美が、消えて居了うのである。

此點に至ると、處女の美は非處女より遙かに優つて居る。其の頬は豐かにして、頸は圓く乳房は半球を劃したるが如く、胸は張り、臀部は圓く隆起して、四肢に至るまで、圓満なるさまは、全く優美の極致である。此の趣きは同じ女であつても、到底人の

妻となりたる者に、求むることは出來ぬ。

3 【美術家のモデル觀】

斯くの如く處女の肉體美は、美の精華であるから、之れに關して美術家のモデル觀を叩くも面白い。谷中三郎氏は、處女の肉體美と題して、次ぎの如く言はれた。

本當の肉體美は、處女でないと得られぬと、美術家は誰もいふ。昨年の製作に使つたときは、美事なからだであつたものが、久し振りで雇つて見て、其の變化の甚はだしいのに驚くことは、珍らしくないといふことである。近い話が、去る六月二日谷中眞島町の、大平洋畫會で多勢の美術家と、モデルとが寄り合ひ、秋の製作に使ふモデルの選定會を開いた時、其の第一になつた女……それはのびのびとした立派な體格で、肉付きもよく、器量もよく、何十人といふ美術家が、我れ勝ちに雇ひたいと焦慮つたのが、とうとう籤引きで、彫刻の吉田芳明、上田

直次、保田龍門三氏が使ふことになり、毎日午前、午後から夜まで、此の三軒を順々に廻つて歩いて居る中、不思議にも、毎日からだの美しい曲線が、崩れて来て、一週間も立たない中に、とうとうモデルの役に立たぬやうな、憐れなからだになつて了つたので、三氏は到々製作を途中で、止めねばならぬことになつた。それで物好きに或る者が、いろいろ其の事情を調べて見ると、其の女は、選定會の日には、嫁に行つて、十日目だつたといふことが判明つた。實に恐ろしいものである。それが何ういふ風に、違つて来るかといふに、先づ第一張りのあつたふつくりした綜の肉が、こけて来る。咽喉から胸にかけての肉も、だん／＼落ちて、最も著しく變はるのは、臀部の形である。

それで敏感な美術家の目には、それがはつきり認められ、「あの女は、此の頃ひどく感じが悪くなつて来たぞ」と云へば、美術家仲間では、其の女の素行上のことが、千里眼の様に見えるのださうだ。素人目にも容易く分かるのは、頬のこけ

ることである。普通彫刻家でも、畫家でも、女を處女に見せるときには、頬に豊かな肉を盛る、さうすると如何にも其の顔は、生娘らしく見えるのである。

處女の肉體の、常に緊張して居る譯は、右の事實に依つて、推知することが出来るであらう。随つて處女といつても、其の顔なり、乳房なり、臀部なりに、變はりがあつたならば、それは眞の處女でなくして、偽者であることも、了解せらるゝであらう。

二 婦人の身長を伸ばすには、處女時代に於いて、運動をよくするにある

1 【先づ男女の身長に差あることを知れ】

男女の差異の中にて、最も明らかに人の目に着くものは、容貌と風姿とを除いて

婦人の身長を伸ばすには處女時代に於いて運動を能くするにある

は、身の長けと、其の大ききとである。元來身長といふものは、人種及び種族に依つて、異なるものであるけれども、何れの人種又は種族に於いても、男の脊は高くして、女の脊は低くある。其の人種上の差は、甚はだ著しくあるけれども、男女間の差は、略ぼ一定して、男は女よりも高いに決まつて居る。これは人類界に於ける、自然の法則にして、男女は生まれながらに、其の大小を異にして居る。

精密なる測定に依れば、歐洲の初生兒は、男兒に於いて邦尺一尺六寸二分強、女子は一尺六寸弱である。日本にては初生男兒の身長は一尺六寸二分、頭圍は一尺一寸二分、胸圍は一尺七分、指極は一尺五寸四分、下肢の長さは六寸三分にして、初生女兒の身長は一尺六寸一分、頭圍は一尺一寸、胸圍は一尺七分、指極は一尺五寸三分、下肢の長さは六寸二分である。

英國人の例に依れば、男の身長は、平均邦尺五尺六寸一分、女の身長は平均五尺二寸八分にして、其の差は三寸三分である。故に男の身長を百とすれば、女の身長

は九四・一にして、女は男より低いこと、約百分の六の割合である。

白耳義人も男女身長之差は、英國人と同じく、約三寸三分にして、佛國人はこれより少しく多く、三寸九分六厘である。米國人はそれよりも尙多くして、約四寸二分九厘である。箇様に差の多くなるのは、男が女よりも著しく大きい爲めでなく、女の方が、男よりも餘計に低い故である。

本邦人に於ける身長は、明治生命保險會社の調査に依れば、年齢二十一歳乃至二十五歳の男は、平均五尺二寸五分弱、同年齡の女は、平均四尺八寸四分弱にして、其の差は約四寸一分である。故に女は男の百に對して、九二・二の割合である。更に同會社に於いて、年齢の進みたる男女に就いて、調査したものに依ると、二十六歳乃至三十歳の男は、平均五尺二寸七分弱、同年齡なる女の平均身長は、四尺八寸五分強にして、其の差は約、四寸二分すなはち百に對する九二・一の割合である。

箇様に二十五歳前よりも、二十六歳以後に至つて、其の身長差の加はるのは、男

婦人の身長を伸ばすには處女時代に於いて運動を能くするにある

の發達に基因するのである。女も二十六歳以後に、少しは伸びるけれども、男ほどではなく、男の方は二十六歳以後にも、尙、發達して行くので、右のやうな差を生ずるのである。之れを略易く表に示すと、次の如くである。

年 齡	男 子	女 子	其の差
二十一歳乃至二十五歳	五尺二寸五分強	四尺八寸四分弱	四寸一分
二十六歳乃至三十歳	五尺二寸七分強	四尺八寸五分強	四寸二分
其の 伸 長 度	二 分	一 分	分
平 均	五尺二寸六分	四尺六寸四分五厘	四寸二分五厘

之れを前の西洋人に比較すると、其の身長差は、佛國人と、米國人との間に位して英國人及び其の他よりは少し多い。併し世界の男女を比較して、其の差は甚はだしく懸隔してないのは、男女の身長に、略ぼ一定の標準がある爲めである。

2 【男女の身長に差ある原因】

前述の如く、男女の身長に大差があつて、男の長大に、女の短小なのは、如何なる原因であるかといふに、之れに次ぎの二原因がある。

- 一 下肢の長短に差あること。
- 二 軀幹の大小に差あること。

一體、身長なるものは、軀幹と下肢との長短に關するものであつて、其のうちでも、下肢の長短が大に關係して居る。それで下肢の長大なる者は、隨つて身の丈高く、之れに反して、下肢の短い者は、低小である。語を換へて之れを言へば、身長の差は、下肢の長短に關するといふことである。

それで下肢の長短は、男女に依つて何う異なるかといふに、男の下肢は、軀幹に比例して長いけれども、女の下肢は之れに反して居る。すなはち男は、軀幹と下肢

婦人の身長を伸ばすには處女時代に於いて運動を能くするにある

と殆んど等長であるが、女の下肢は、胴よりも短かいのである。

此の事實に基づいて、今、假りに全身の長けを、五尺とすれば、其の軀幹と下肢其の他部分との比例は、次ぎの如くなる。

身體の部分		男	女
軀幹	二尺五寸	二尺五寸三分	
下肢	二尺五寸	二尺四寸七分	
頭長	六寸二分五厘	六寸二分三厘	
上肢	一尺九寸	一尺八寸九分	
指端より腕に至る	五尺二分三厘	五寸八厘	
乳房より腰關節に至る	一尺二寸五分	一尺二寸六分	
臍より上部	二尺三寸	二尺二寸九分	
臍より下部	二尺七寸	二尺七寸二分	

斯くの如く、男は下肢が長く、女は之れに反して、下肢よりも軀幹の方の長いのは、如何なる理であるかといふに、これは男は、平素家外にあつて、勞働に従事する爲めで、自然下肢が發達するやうになつたけれども、女は家内にあつて、下肢を働かすことが少ないのと、今一つは、女は妊娠の爲めに、大なる腹を要する結果、軀幹が長くなつたのである。

筒様に男は脊高く、女は低いけれども、面白いことは視覺の錯誤に依つて、外觀上女は、左程小さく見えないことである。これは頭髮を結んで、化粧を施したり、衣服の仕立てを長くし、又は幅廣の帶を、胸高く締めて、下行部を長くする等、裝飾の仕方に依るのであつて、女は實際の身長よりも、大きく見えるものである。それで日本人では五尺二三寸の男と、四尺八九寸の女とは、恰好似合つて見えるが、同じ脊の男女となると、女の方が著しく目立つて、蚤の夫婦のやうに見えるのである。

婦人の身長を伸ばすには處女時代に於いて運動を能くするにある

3 【何故女は脂肪に富めるか】

身長に次いで、男女の差異を呈するものは、身體の重さ即ち體重である。けれども體重は、一々計量器にかけて、計つて見なければ判然しないから、身長のようにたい見積りで、其の差を知ることが出来ぬ。

精密に男女の體重を計つて見るに、人に依つて種々であるけれども、一般に男は重く、女は軽くある。それで同じ年齢の男女を計つて見ると、必ず男は重く、女は軽いに決つて居る。其の差は約、男の百に對して、女は八十七・四である。

前の生命保險會社にて、採りたる統計に依れば、二十一歳より二十五歳までの體重は、男は十三貫九百五十七匁弱、女は十二貫四百二十五匁弱にして、二十六歳より三十歳まででは、男は十四貫百二十七匁強、女は十二貫三百四十匁弱であつて、之れを平均すると、次ぎの如くで、これが正しい數字である。即ち、

性	體重
男	十四貫四十二匁弱
女	十二貫三百三十三匁弱

にして、其の差は一貫七百九匁である。西洋人も、男は女より重く、其の差は男の百に對する女は八十乃至八十七の比例である。

簡様に女は、男より絶對に軽くあるが、これは女は男より小さいから、軽い理だといふ人があるが、それは間違ひである。何となれば男女の體重は、身長との比例から割り出しても、女は男より軽いからである。故に女は對比的にも、男より軽く其の差は百に對する九十七、五である。

右の如く男女の體重に、差のあるのは、如何なる理かといふに、これに次ぎの二原因がある。

一 身長に對する差。

婦人の身長を伸ばすには處女時代に於いて運動を能くするにある

二 筋肉と脂肪との割合。

第一の身長に對する差といふのは、女は身體が小さいから軽いと、いふことであるが、併し、身長に比例して見ても、女は男より軽いことは、前に述べた如くである。

第二の筋肉と脂肪との割合は、男女の體重の差を生ぜしめた、主因である。此の二者は男女に依つて、如何に異なるかといふに、男は脂肪よりも、筋肉の方が發達し、女は其れに反して、筋肉よりも脂肪に富んで居る。或る學者は、男は筋肉の塊りで、女は脂肪の塊りであると言つた。男の身體の頑丈にして、皮膚の硬いのは、全く筋肉の發達せるため、女の肌の滑かに、且つ柔かなのは、脂肪の多い爲めである。脂肪は主に皮下と、筋肉の上層との間に、存するものにして、脂肪の多い者は、少ない者よりも肥えて、曲線美を呈するものである。小兒の肥えて居るのも、此の理であつて、其の肌は男の兒でも女の肌と同じである。

ビシヨッフ氏の説に依れば、男の筋肉を百とすれば、其の脂肪は四十三に過ぎぬけれども、女の脂肪は七十八である。其の代り筋肉は、僅に二十二である。之れを表で示すと次ぎの如くである。

性	筋肉	脂肪	計
男	五七	四三	一〇〇
女	二二	七八	一〇〇

絶體的にも、對比的にも女の男より軽いのは、之れが爲めで、多量の脂肪に歸するのである。それで假りに男女を、同大の者としても、女は男より軽いことは、重ねて言ふまでもない。

斯くの如く女の脂肪に富んで居るのは、生殖といふ大任を負ふて、之れを遂ぐる爲めである。脂肪は胚子の營養となりて、之れを發育せしむるに缺くべからざるもので、直接に生殖機能を負担する女性は、必らず脂肪を、多く含蓄しなければなら

婦人の身長を伸ばすに處女時代に於いて運動を能くするにある

ぬ。生殖器官は勿論、筋肉及び組織間にも、多量の脂肪が蓄積し、特に皮下に多く加はりて、皮膚を軟滑にする結果は、肌に艶麗を添へて、ます／＼曲線美を發揮せしむるのである。曲線美は即ち脂肪美にして、異性の目を惹くに必要である。斯くして早く異性の目を引く者は、早く生殖の任務を盡くすことが出来る理だから、脂肪は直接にも間接にも、生殖を助くるものと謂ふべきである。

4 【運動は身長を伸ばし、容姿を美にす】

前に述べたる事實を、茲に概括して言ふと、筋肉と脂肪とは、共に食物に來源し而して男の筋肉は、主に蛋白質より來たり、女の脂肪は、専ら澱粉質に基づくといふことになる。けれども孰れにしても、たゞ此れ等の食物を攝取したのみであつて之れを同化すべく、有要に役立たしめなければ、其の食物中の養分は、十分に吸収せられずして、空しく排泄せらるゝのである。

同化とは、食物中の養分が、腸壁より吸収せられて、人體に變ずることの謂ひであつて、之れをアッシミレーション Assimilation (同化作用) と名づけて居る。而して之れを助くるものは運動で、同化は實に、運動の變形と謂ふも誣言でない。これ運動を能くするときには、滋養分はよく吸収せられ、それが血液に混じて、必要の場所に輸送せらるゝからである。斯くの如くして其の部の器官は發育し、下肢にあつては伸長して、下行部が長くなる。運動家の下肢の、すべて長いのは之れが爲めで、下肢の短い者に、運動家はない、

運動の必要は、當だに身體を強健にする許りでなく、身長を伸ばして、風采を良くするにも、缺くべからざるものなることを忘れてはならぬ。

5 【男女の運動に、如何なる違ひあるか】

さて男女に於ける運動の仕方であるが、これは大分違つて居る。一般に男は活潑

婦人の身長を伸ばすには處女時代に於いて運動を能くするにある

にして、能く運動するけれども、女は爾うでない。野蠻或ひは未開の世にあつては女も男に劣らざる労働に従事し、甚はだしきは女を軍隊に編するところさへある。或ひは又、男は逸居して、只管女の労働にて、生活するところもある。爾ういふ種族にあつては、女の運動は、確かに男よりも活潑である。けれども文明の世にあつては、これと全く反対の現象を呈し、男は労働して、女は家内の務めに、従事するを其の責任として居る。尤も下層社會の労働者には、女にて労働に従事するものがあるけれども、これとても大なる勞力は、みな男のすること、女は僅に之れを補助するに過ぎないのである。

男女の運動状態に關して、之れを研究した學者の説に依ると、男の運動は、遠心的にして、攻撃の態度を執り、女の運動は求心的にして、防禦の位置に立つといふことである。一例を挙げると、下肢の運動で、男の下肢筋は、外方に伸展することに適するけれども、女のそれは内方に屈して、脚を閉づるに適して居る。女の貞女筋と

いふのは、上腿の内層にある内直筋のことにして、これは脛を屈し、股を内方に引く作用を爲すものである。此の筋の女に能く發達して居るのは、股を閉合する必要から來たものと看做すべきである。

それから運動の速力に就いて、ジャストロー氏の説に依れば、短距離なる隨意運動にては、女の方が速いけれども、長距離の大運動になると、女は到底も男に及ばぬ。これは下肢が短く、且つ疲労し易い爲めである。

6 【疲労は何うして起こるか、其の男女に於ける差異】

疲労とは、筋肉の中に、老廢物が蓄積するに依つて、生ずる一種の感覺を謂ふのである。其の感覺は、之れを生じたる場所に依りて、一樣でないけれども、老廢物が細胞の活動を妨げて、其の身體に及ぼすところの、生理的變化は、みな同一である。

疲労の度は、運動の大小に比例するものにして、大なる運動を爲すときは、随つて疲労も大であるけれども、體格の強弱と關係があつて、弱い者は、少しの運動にても早く疲労し、強い者は疲労し難くある。故に疲労は、體格と運動とに關係するものにして、之れを計る器械に、疲労計測器といふのがある。此の器械に數種あるが、伊太利のモツソンの發明せる、エルゴグラフと稱するものは、最も完全にして之れに依るときは、女は運動に於いて、早く疲労し、且つ體力を持續することは、男子に劣つて居る。

斯くの如く女は、男よりも、早く疲労するのは、一口に言へば女は、男よりも弱いからといふことに歸するけれども、深く其の理を究むるときは、之れには種々の關係があつて、それが錯綜して、筒様な現象を呈するのである。其の主なる原因は、女は

一 筋肉の薄弱なること、

二 屈筋が発達して、伸筋の強いこと、

三 脂肪が多くして、早く燃焼すること、

四 老廢物が早く蓄積すること、

五 體質が粘着性に富んで居ること、

等で、それが爲めに又、女の疲労に耐ゆる力が、男よりも強いといふ、面白い現象を來たすのである。

これは疲労しても、永く持續するといふことで、本來から言へば、早く疲労する者は、早く役に立たなくなる理であるけれども、女は耐疲性に富んで居るので、べた／＼に疲れても、尙、其の仕事を續けることが出来るのである。それ故女は疾患に罹かつて、之れに耐える力が強く、男は十日で斃れるところを、女は十二日も十三日も、長く持ち耐えることが多い。これは男と同一の疾病に罹かつて、同じ症候の下にあるものに就いて、測つた試みである。

婦人の身長を伸ばすには處女時代に於いて運動を能くするにある

7 【男性化の傾向ある現代處女の體格】

如上に説述せる如く、男と女との體格には、相異があつて、女子は一般に短小であるけれども、此の短小は運動に依つて、多少補足することが出来る。何となれば女子の短小なる原因は、生殖上大なる骨盤を要する爲めと、今一つは習慣的因襲との二つで、其の他には特別の原因がないからである。

婦人が男よりも、濶大なる骨盤を必要とすることは、生理の然らしむるところで變更することは出来ないけれども、習慣は之れを改むることに依つて、變化することが出来る。此の習慣は、前開きの衣裳を着、巾廣の厚帯を締めて、甚はだしく運動を妨げる結果、脚の發達を阻害して、短小を誘致したる下肢が、遺傳して一般に婦人の短小を來たしたのである。

それで婦人の運動を能くして、右の習慣を打破するときは、下肢の伸長を來たし

て、風姿の美を増加すること疑ひがない。爾うするには前開きの衣服では、脛が露出して、活潑の運動が出来ないから、小學校時代から袴を着用し、家庭に於いても之れを勵行することが必要である。日本婦人の内輪足は、種々の原因から起こつて居るけれども、前開きの衣服を着て、歩行或ひは運動の際、脛が露出しないやうに氣を留めて、足を内方に向ける習慣も加はつて、其の一因となつたのである。

西洋婦人に内輪足の無いのは、裾の長い圓袴を纏ふて、運動が活潑に出来る爲めもある。然るに日本の婦人は、少しでも烈しく歩行しやうとすると、直ぐに前の裾が開いて、脛が露出し、甚はだききは内股までも現はるゝことがある。それを掩い隠す爲めに、長い蹴出しを用ひるのかも知れぬが、併し蹴出しを締めて居れば、前が開いても宜いといふ理はない。蹴出しは股衣と同じもので、寧しろ尾籠なものである。のみならず蹴出しを用ひても、脛の露出することが同じであるから、女の袴の無い衣服は、決して運動に適したものと謂はれぬ。

婦人の身長を伸ばすには處女時代に於いて運動を能くするにある

少女が袴はかまを用ひて、運動を能くするときは、脚の發達はつたうを助けて、身長しんちやうの伸び、且つ足の内向うちむかひを妨さまたぐる原因げんいんとなることは、學校の女生徒じやうせいとに於いて、證明せうめいすることが出来る。試みに家庭けいたいに於いて、母と妙齡めうれいの娘むすめとを、比較ひかくして見ても分るであらうが、大抵たいていの家では、娘むすめの方が母よりも身長しんちやうが伸びて居る。これは舊日本きゆうにほんに育つた母が、足の運動うんどうを缺いた爲めに、横よこに伸びて、縦たてには伸びないが、今の女學生にようせいは足の運動うんどうを能く行ふ結果、横よこよりも、縦たてに發育たつとした爲めである。

これからの處女の體格たいかくは、漸々異性化いせいけあして來る傾向けいかうがある。これはみな運動の結果であるが、袴はかまを用ひる効果は、没ほつすべからざるものである。此の點てんに於いて、近來流行する改良服けいりやうふくも、必要ひつやうである。斯くの如くして下肢しんてうが伸長しんちやうして、上行部じやうぎやうぶとの釣合てうがひが取れると、姿勢しせいが良くなつて來るから、これからの處女は、體格たいかくが健全で、姿勢しせいの好い美人びじんとなるであらう。

三 處女の乳房

1 【乳房の意義及び其の性的關係】

廣義くわうぎに言へば、乳房にゅうぼうに二様の意義いぎがある。一は無意味むいみなるものにして、他の一は意味あるものである。前者ぜんしやは男性だんせいに存する乳房にゅうぼうにして、後者こうしやは女性の有する乳房にゅうぼうである。女性の乳房にゅうぼうは、生殖せいじと密接みつせつなる關係けんけいがありて、之れを生殖器せいじくきの一部いちぶとさへする者がある。故に單に乳房にゅうぼうと言へば、女子の乳房にゅうぼうのことであつて、其の性的關係せいじくけんけいに亦、次ぎの二説がある。

- 一 第一次の性的器官と爲す説。
- 二 第二次の性的器官と爲す説。

甲説けうせつに依れば、乳房にゅうぼうは生殖器せいじくきの一部いちぶにして、而かも蕃殖器はんしよくきに屬するものであるけ

れども、陰部とは其の位置を異にするに依り、之れを生殖器と看做す者は無いが、併し、官能の上から言へば、確かに生殖器の一部であると。乙説に従へば、乳房は男子の髭鬚、又は女子の頭髮等の如く、性的特徴に属するものにして、女性美を助け、之れに依りて異性の目を引くところの、誘引器官となるものである。

乳房と生殖器との關係を唱道せるものは、プロホ、ヒルデブランツ諸氏であつて胸壁に位する外生殖器と言つて居る。乳房の機能より言へば、それに違ひないけれども、其の豊大にして美しきと、異性の目を惹くとは、生殖器の一部とするよりも寧ろ第二義の性的特徴とする方が適當である。

之れに關しエリス氏は、乳房の第二義なる性的特徴を、恁う説いてある。乳房は間接に生殖を助くるものにして、ダーウキン氏の謂はゆる、性的淘汰 Sexual Selection に依りて、筒様に美しく發達したものであると。

此の説は穩かであるけれども、併し予輩の考へでは、單に第二次の性的器官のみでは、乳房の本來の作用が無くなつて了うから、第一義と第二義との兩作用を、兼ねるものと謂はなくてはならぬ。

2 【乳房の位置及び其の形態】

女子の乳房は、前胸壁の第三肋骨から、第六肋骨に跨つて、廣き面積を占め、其の中心は第五肋骨に對して居る。乳房が即ち其の中心で、それから圓く周圍に擴がつて居る。

乳房の形態は、年齢、結婚、妊娠、分娩及び授乳の有無、その他の事情に依つてさまざまに變ずるが、大體に於いてこれを五種に區別することが出来る。即ち圓盤形、半球形、圓錐形、鐘形、及び楯形等で、處女の乳房は、半球形である。

圓盤形乳房は、圓盤の如く隆起の弱いものであつて、これに屬するものは、破瓜期に達せざる少女の乳房である。半球形乳房は、球を二分したやうな形で、腕を倒

にすると、此の形が出来る。破瓜期に達したる處女の乳房がこれである。原則として未婚者の乳房は、形正しくあるけれども、分娩、授乳を絶たる者の乳房は、稍々下垂して、圓錐形に移行するのである。

圓錐形乳房は、先端の尖れるものにして、授乳屢々なるときは、此の状態となるものである。鐘形及び播形は、下垂の程度に依るものにして、鐘の如くなれるものは鐘形乳房、それより一層著しく下垂したものは、播形乳房である。尙、播形の一種に、絲瓜形乳房と稱するものがある。授乳の除々、乳房を引き伸ばす習慣のある者に、見ることもある。

之れを要するに乳房の形態は、前述の原因の外に、人種、體質、營養、習慣、職業及び生活状態等にも關係があつて、性的生活とは密接なる關係のあること、既に一言せる如くである。

乳房の人種的特徴は、特に著しくして、屢々授乳しても、半圓形を失はざるもの

がある。之れに反して授乳しなくとも、分娩すると弛緩して、圓錐形若しくは鐘形を呈するものがある。前者の例は英國及び其の種族の婦人にして、後者には佛國及び其の種族の婦人である。

本邦の婦人には、元形を保つもの多く、屢々分娩且つ授乳せるものにして、美しき半圓形を呈するものが少なくない。朝鮮婦人及び支那婦人等も、之れに類して美なる方であるけれども、英國婦人ほどではない。

3 【乳房の構造及び其の發生】

乳房は、之れを形態學的に區分すれば、乳體、乳暈、乳頸、及び乳頭の四部より成る。乳體は胸壁に附着せる豐隆の部分にして、其の中央に突起せる小球體は、乳頭である。乳頭は一に乳嘴といひ、粘膜に覆はれ、其の表面に更に數多の小突起がある。それから乳頭と乳體との接續せる部分は、乳頸にして、細微なる輪狀の皺壁

がある。乳量は乳頭の周圍に存する、有色の部分にして、未通の處女にあつては、淡紅色であるけれども、妊娠すれば暗褐色となること、人の知る如くである。

乳體の内部には、多數の乳腺がありて、輸乳管と連絡して居る。乳腺は複葡萄狀腺にして、多くの腺葉より成り、各腺葉は更に腺胞に分かるゝのである。乳汁は腺胞の細胞より、分泌するものにして、これを輸送する輸乳管は、乳頭近くに於いて膨大し、茲に乳汁を蓄ふる用を爲す。これ房竇と稱するものである。又、乳腺の周圍には、脂肪囊があつて、これを纏絡して居るのは、乳汁の原料を供給するが爲めである。

乳頭の表面に存する小乳頭には、輸乳管の外口なる小孔が開いて、これから乳汁を分泌するのである。乳量にも、亦小乳頭があつて、輸乳管を通ずるものがある。輸乳管の乳頭に開ける部分には、括約乳頭筋と稱する筋肉があつて、これを圍繞して居る。これが乳頭である。

これより乳房の發生に就いて、一言せんに、初めは脂腺の團集せるが如き形であるが、各脂腺は發達して乳腺となるのである。併し五六歳までは微小にして、目立たぬが、十一二歳より漸々膨大し、破瓜期に至れば、著しく豊隆となりて、半球形となるのは、乳腺が發達するからである。

4 【婦人美としての乳房】

乳房は婦人美の一要素にして、美人には美なる乳房が、附きものになつて居る。此の感想は西洋婦人に著しく、彼れ等の社會では、乳房が美しくなければ、眞の美人でないと言はれて居る。日本では服裝の關係で、乳房が有るか無いか分らないが、西洋婦人にあつては、高く胸上に隆起して、外から其の所在が認められて居る。随つて西洋婦人は、大なる乳房を得意として、これを誇るだけ、常にこれを保護して、大切にして居るのである。

併し西洋婦人が大きな乳房を得意とするといつて、樽のやうに膨張したものや、鐘の如くに突出したものを、喜ぶのではない。彼れ等の觀賞する乳房は、ヴェヌス Venus 女神の、像に於いて見るが如く、半圓球にして、ふつくりと膨れ、而かも理細かく、大理石の如く白くして、彈力のあるものでなくてはならぬ。

筒様なる乳房は、西洋人のみならず、我が國人も同様に、これを美房と稱するけれども、本來我が國人は、西洋人の如く、乳房を餘り八釜しく言はぬ國民である。又、日本人は乳房の露出を、爾う恥かしいと思はぬ國民である。上流の婦人でも、宴會などで胸襟を開いて、其の兒に授乳することが多くある。電車の中で若い婦人が、平氣で胸を披いて、乳房を嬰兒に哺ませて、居るところを見ることがあるが、其の乳房は細長くして、醜いものが多い。全く容貌の反對で、これは授乳から起る變化である。

併し處女の際は爾うでない。結婚前の娘となると、規則通り半球形で、美しくある。それで美術家がモデルを採用するには、必らず處女から選ぶことになつて居る。授乳しなくとも、結婚したものであると、乳房が崩れて来て、モデルの役に立たなくなることもある。

それから乳房と性慾との關係であるが、これは前に乳房は、第二次の性的器官であるといふ一事で、了知することが出来る。女の裸體より來たる刺戟は、腰部にあるとして、年々開設の展覽會に、裸體畫及び裸體塑像の陳列を禁じられたる場合に於いても、其の腰部を布片にて掩へば、差し支へがないといふ極めて不自然な態度をもつて、辛うじて陳列を許されたこともあつたが、腰部を蔽ふ位ならば、何故胸部も蔽はぬであらうか。腰部と胸部とは異なるけれども、腰部が俗人の目を刺戟するだけ、胸部も刺戟の原因となることを考へなくてはならぬ。

勿論、民族にも依るが、風俗及び習慣に依つて、胸部より來たる刺戟を、腰部以上として、これを秘密にしたる民族がある。例へば支那の廣東にては、腋窩を秘密に

して、異性のそれに對するときは、生殖器以上に亢奮するといふが如き、此の類である。歐洲にても佛國にては、十七世紀より十八世紀の初頃までは、乳房を神秘的なものとして、陰部同様に恥ぢたることがあつた。嘗つて佛國の恐嚇政治時代に、時の巨頭マラーを刺殺したる少女シャロット、コルデイが、法廷に引かれて審問を受くる際、守衛が法官の命令にて、コルデイの懷中せる書面を奪はんと、其の胸襟を披いた時に、流石のコルデイも顔を赤めて、打ち伏したといふことである。

斯くの如く乳房を秘密にしたのは、性的關係の密接なる爲めで、これは寧ろ當然と謂ふべきである。其の性的關係は、間接には誘引器官となり、直接には子宮との關係となりて、相互に連絡するに依り、乳房の激烈なる刺戟は、子宮の收縮を來たして、妊娠の際には流産を來たすことがある。

5 【乳房の變化と民事問題】

乳房は一生涯の間に、種々に變化するものであつて、其の變化が、恰も顔の變はり行くと同一である。これは餘り人の心着かざるところであるが、法醫學者の目より觀れば、乳房は婦人の第二の面貌といふ格にして、實に其の性的行爲と關係するのみならず、婦人の性格及び其の精神状態とも關して、容易に變化することが了解する。乳房に依りて、處女と非處女とを、區別し得ると前に言つたのは、これが爲めにして、悪いことは決して出來ぬ。何故左様に、乳房は物を言ふか。左に少しく之れを説明するのであらう。

破瓜期時代に於ける處女の乳房は、ヴェヌス型となりて、美しく緊張すること、前に述べた如くであるが、此の際性的行爲があると、乳房が發達して、愈々膨大するけれども、全體に弛緩を來たして、軟化する傾きがある。それ許りでない色素を沈積するので、乳暈の色が少しく濃くなる。尤もこれは極めて微小の變化であるけれども、經驗のある醫師が之れを見ると、發見することが出来る。

次ぎは妊娠との關係にして、乳房の變化中、最大なるものである。これ妊娠するときは、乳房に通ふ血管が太くなつて、多量の血液を送るので、乳房は膨大するに従ひ、乳量も次第に暗褐色に變ずるのである。此の着色は妊娠の進むに従ひて著しく、臨月近くなると、殆んど墨色となること、人の知る如くである。

注意すべきことは、乳汁の分泌であつて、妊娠中にも、稀薄な乳汁が、壓窄すると少し許り出る。これは初乳と稱するもので、分娩後も一二日間は、續いて出るが漸々に普通の乳汁に變つて行くのである。

斯くて授乳を始むるときは、乳頭は吸吮せらるゝ爲めに、少しく橢圓形となり、乳量も隆起し、尙、乳房は乳腺の充實する毎に、膨張しては弛緩するので、次第に垂下するやうになる。

これが授乳に依つて起こる變化であるが、授乳しないでも、乳房の變化は免れぬ。特に嬰兒の死亡等の爲めに、乳を窄つて棄て、了ふ場合には、乳房は早く萎縮して役に立たなくなる。筒様な婦人が處女、或ひは未妊を裝ふても、容易に發見せらるゝのである。

それで乳房は、法醫學と大なる關係があつて、民刑事問題に、應用せらるゝことが多い。例へば未婚と既婚との鑑定、夫に死に別かれ、或ひは離縁になりたる婦人の、再婚せんとする場合、姦通、墮胎、嬰兒殺し、私生兒の決定、及び初期に於ける妊娠の鑑定等、で法醫學上必要である。

四 臀部と性的關係、及び其の形態に於いて 處女と非處女とを識別する法

1 【臀部の生理的機能と美的形容】

臀部は左右腰關節の、後面に突出せる部分にして、女子の臀部は著しく豊隆して

臀部と性的關係及び其の形態に於いて處女と非處女とを識別する法

居る。其の骨盤を圍んで、殆んど身體の中心に位し、而して密接なる性的關係を有することは、恰も乳房の如くである。

女子に於ける此の性的關係の一は、生殖機能にして、他の一は誘引的作用である。生殖機能は骨盤内に於いて營まれ、誘引作用は美的形容となりて、異性の目を惹くことに依つて行はるゝのである。女子の臀部は、此の目的に向つて、發達したと謂ふも誣言でない。

斯くの如く女子の臀部は、生殖と誘引との、二作用を具へて居るが、美的形容となつて、異性の目を惹く方は、著しく發達して居る。故に臀部は、美の一要素にして、姿勢の中心となる。語を換へてこれを言へば、女の風姿といふものは、臀部の大小に依つて定まるもので、脊のすなりとしたところに、豊かな臀が、廣く場所を占めて居れば、上下の釣合ひが好く取れるけれども、若し臀が狭小なるときは、男の腰附きの如くなつて、體の細い女が、愈々細く恰も柱に衣服を着せたやうになるであらう。

筒様な婦人は、如何に顔ばかり美しくとも、決して美人といふことが出来ぬ。これを要するに、豊かな臀は、美人の資格にして、小なる臀は、美の資格を缺くといふことになる。尤も美人には、皮膚と身長、及び乳房との調和を要するものであるから、其の調和が取れるやうに、少さひ時から身を躡けなくてはならぬ。

2 【臀部の大小と姿勢】

然らば如何なる臀部は、他の部分と調和して、姿勢を好くするかといふに、モデルとして言ふときは恁うである。

- 一 身長はすなりとして、高からず低からず。
- 二 肉付きは豊かにして、甚はだ太から細からず。
- 三 肌の理細かにして、滑澤なること。

臀部と性的關係及び其の形態に於いて處女と非處女とを識別する法。

四 肩は撫形にして、怒らざること。

五 乳房は胸に半球を畫したるが如く、隆起すること。

六 胸より下部は細くなりて、帶筋のところ止まり、それより漸々太くなりて豊大なる臀部に接續すること。

七 脚は臀部に比して、餘り短からぬがよい。

筒様な姿勢は、完全にして、其の上容貌が美しいときは、眞の美人と稱するを憚らぬ。容貌の美は、色の白きを上乘とし、姿勢はすらりとした身に、臀部の豊大を最良とするのである。

けれども斯かる姿勢と、容貌と調和した人は、實際は少なくして、何れかに缺陷のある者が多い。途中に於いて出逢ふ婦人を見ても分かることで、極美の婦人は稀有である。婦人の多く集合する、婦人會などに行つて見ても、目立つて美しい婦人は無いものである。是れに由つてこれを觀れば、世に眞の美人は少なくして、大抵

の婦人は十人並みといふところである。

姿勢と容貌とよく調和した婦人は、減多に無い。例へば容貌が好いと思へば、身長が低かつたり、身長が高いと思へば、瘠せ過ぎたり、或ひは肥えて大女に見えたりする類である、

或る人は、日本婦人の姿勢の悪いのは、衣服の裁縫が良くない爲めである。それに穿物が下駄のやうな、甚はだ不完全なものを引きすつて歩くから、自然胸が前に屈して、姿勢が悪くなつたと言つて居るが、これは一理ある説である。日本婦人の内輪足の如きは、前開きの衣服と、不完全な穿物を用ることとから、起つたことは前に説いた如くで、日本婦人の此の不恰好な姿勢を矯むるには、先づ其の衣服や、穿物からして改良しなくてはならぬこと勿論である。

之れに反して西洋婦人の姿勢は、良好にしてよく容貌と調和し、品位が具つて、氣高く見えるのは、顔と身長及び臀部との釣合が、よく取れて居る爲めである。西

洋婦人は身長しんてうの割に顔が小さく、胸が張つて、特に豊大ほうだいなる臀部でんぶの上うへが狭せまく、それから細くなつて居るので、極めてよく調和てうわして見える。然るに日本の婦人ふじんは、顔許かほかり大きく、それに下肢かきが短いので、之れを裸體らたいにして見ると、不恰好ふかこう此の上うへもない。

右の事實に依れば、婦人の臀部でんぶは、身長に比例して豊大ほうだいなるものを美とし、男の如く狭小けうせうなる臀でんぶは、決して美なるものではない。故に狭小けうせうなる臀部でんぶを有する婦人は美人にあらずして、其の姿勢しせいは男性的だんせいらしくある。之れに關しエリス氏は恁かう言つた。往昔むかし希臘人ギリヤ人は、女の裸體畫、及び彫刻てうこくに於いて、其の臀部でんぶを小さくした爲めに著しく婦人美を滅却めつじやくしたのみならず、婦人の體格たいかくをして、男性ちかよに近寄ちかよらしめたと、氏は之れをもつて、婦人美の退化たいくわと歎息たんそくした。我が國にても、徳川時代の畫家がくがは、婦人の臀部でんぶを小さく描えがいて、恰まさも針の如く細い姿勢しせいを、尙たうとべる風ふうのあつたに就ついては、吾人エリス氏の感かんなくんばあらずだ。

然るに歐洲おうしやうにては、醫學の開ける頃から、又、美術家がモデルを使用するやうになつてから、實際に則つて、婦人の臀部でんぶを豊大ほうだいに描えがき、彫刻てうこくにも大きくすることになつたので、從來の男性的だんせい典型てんけいは廢れて、一般に豊臀ほうでんが歡迎せらるゝやうになつたけれども、男性的の美人は、今、尙古代の繪畫及び彫刻てうこくに、數多遺あまたされて居る。日本にても同じく、徳川時代の針的美人はりてきびんは、錦繪の上に残つて居る。

何れから見ても、婦人美は解剖學の上より、嚴密に調査てうさしなくてはならぬ。肉體の上うへに於いて、頸くび、肩かた、胸むね、乳房ちゆうぶ、腹はら、腰及び四肢等、各部分の割合わりあひを取つて、之れを比較ひかくしなくてはならぬ。さうするには勿論衣服は邪魔じゃまになるから、裸體らたいとして調査てうさしなくてはならぬ。此の點てんに於いて、モデルは必要なものである。

3 【視覺の錯誤に於ける婦人の裝飾美】

臀部でんぶのことから、婦人美及び一般姿勢はんしせいの上うへにまで、及んで來たから、其の序ついでに、

婦人の裝飾に胡魔化されて、元來不調和の婦人を、調和したものの如くに見ることを述べやうと思ふ。これは生理學上謂ふところの、錯覺で、裝飾の爲めに、視覺が誤まるのである。

さては日本人は、一般に矮小にして、風采が乏しい方であるが、取り分け婦人は甚はだしくして、西洋婦人に比較すると、さながら小兒の如くである。けれども妙なことには、斯かる短身な婦人でも、頭髪を結び、胸高く帯を締めて、下行部を長く装ふと、釣合ひが取れるものである。併し裸になると、短い脚が現はれて、まことに不恰好になるけれども、此の缺乏を補ふものは裝飾で、裝飾は必要である。

もう一つ視覺の錯誤で、中年以後の婦人は、相應に身長高く見えるものである。例へば漸く肩揚げの取れた許りの小娘でも、嫁入りして髪を髷にでも結つて、帯をきちんと締めて居ると、奥さん風に見えて、品が上つて來るが如きで、女は實際の身長よりも、高く見えるものである。それで蚤の夫婦といつたやうな夫婦でも、其

の身長を計つて見ると、尙、細君の方が少し低いといふ例がある。つまり裝飾で胡魔化されるのである。

さては女の姿は、其の臀の大小と、身長とに比例して、或ひは美しく、或ひは醜く見ゆるものであるが、男は如何にといふに、其の臀の大なる男は、臀の小なる女と同様、男としての美は減せらるゝのである。尤も男には、女の如くに大なる臀部を有するものは、生理上無いけれども、比較的に大なる臀部を有するものは、俳優として女形に適し、男役には不向である。

それで男は、女に變装するときには、容易に發覺する憂ひがある。それと同様に、女が男に變装しても、直ちに露顯する。俳優であると、女になつたり、又は男になつたり、其の變身術は頗る巧妙であるけれども、それにしても女になつた男は、觀破せらるゝこと容易である。特に女であつて、男になつたものは、尙、更、人の目を惹くものである。これ女は其の大なる臀部を、男の如く小さくすることが、困難

なるからである。男が女に扮装した場合には、臀部に布團などを挿んで、其の上に女の帯を締めるので、看客の目を瞞着することが出来るけれども、女が男になつて男の衣服を纏ふときは、臀部が著しく目立つ。特に男の洋服を着すると、其の大きな臀が、愈々大きくなつて、極めて不恰好である。それ故俳優にしても、矢張男優は男、女優は女と、別々に分擔する方が、藝術を進める上に於いても、適當であらうと信ずる。

4 【臀部の大小形容に關する、世界各民族の習慣】

何故に女の臀部は、濶大にして、男のそれは狭小であるが。これは言ふまでもなく、骨盤の關係であつて、骨盤の大小と、臀部の大小とは、一致するものである。骨盤は男女に依つて異なり、男の骨盤は、上下に高くして、横に狭く、之れに反して女の骨盤は、縦に低くして、横に擴ろがつて居るので、臀部が豊大になるのである。

る。

西洋婦人の臀部は、頗る大にして、日本婦人と比較すると、殆んど倍もあらうかと思はるゝ程、大きく見えるのは、當だに衣服が、臀部を大きく見せるやうに仕立てゝある爲めのみならず、實際に大きいからである。それで初めて日本へ來た西洋人が、日本婦人には臀がないと、言つたとかいふ話もある。

尙、西洋婦人は、臀部を美の最大要素として、之れを大きくすることに、腐心しつゝあるは、恰も日本婦人が、頭髮の手入れに腐心するのと同じである。西洋婦人の臀部は、元來大きいこと、前に言つた如くであるが、それを一層大きくしやうとコルセットを用ひて、下肋部を纖細にしやうと、努めて居る。これ下肋部が細くなれば、細くなるほど、臀部は大きく見えるからである。それで西洋婦人には、故意に臀部に綿などを押し込んで、大きくするものがあるといふことである。

西洋婦人のみならず、野蠻人にも、臀部を婦人美として、賞讃するところが多

くある。ホツテントツド婦人の如きは、其の一例で、而かも其の臀部は、西洋婦人のそれよりも、著しく後方に突出して居るのをもつて、最美なるものとして居る。それでホツテントツド婦人は、之れを裝飾として、幼少の時より臀部の突出するやうに、人工を加へるといふことである。筒様にして發達した臀部は、恰も尻に樽を附けたやうに、著しく後方に突出するのである。

ホツテントツドでも、小兒を脊に負ふこと、我が國人の如くであるが、併しそれは吾人のするが如く、小兒の兩足を、後ろに垂下するのではなくして其の突出した臀部の上に、小兒を立たせて、其の體をば、軽く母體に結びつけるのである。斯かる者は労働する場合であつて、單に小兒を運ぶときなどは、小兒を臀の上に載せた儘で、小兒は臀の上で、遊戯するといふことである。臀部も茲に至れば、重寶であるが、併し之れが爲めに下肢が、著しく後方に傾いて、側面から見ると、實に滑稽な姿勢を呈するのである。

斯くの如き臀部も、餘り極端であるが、本邦婦人の如くに、餘り小さいのも、極端である。併し兎も角、民族に依つて、臀部に大小のあるのは、全く風俗習慣の、然らしむるところにして、臀部の大なる民族は、大なる臀部を好み、小臀の民族は小なる臀部を愛するのである。西洋婦人とホツテントツド婦人とは、臀部の型に於いて差はあるけれども、前者の例とすべきもので、本邦婦人は後者の例である。けれども本邦にても、小臀を喜ぶものは、元祿時代の遺風であつて、其の以前は一般に大なる臀部を愛したる形跡がある。西鶴の本に、

尻付き大きく、平たく見ゆるを好み……………

とあるのは、其の證と見て誤りがなからう。それが浮華輕佻の風に化して、小臀を賞する風となり、遂に臀の無いやうな、美人を出すやうになつたのは、前に言つた如くである。

5 【處女の臀部と其の特徴】

以上は美の一要素として、一般の婦人に就き、臀部の大小を、考査したのであるが、處女も同様で、臀部の大きいのが、美の性質に適ふのである。併し處女の臀部は、既婚者のそれと異なるところがある。これも處女と、非處女とを、鑑定するに缺くべからざる要件となるのであるから、茲に一言しなくてはならぬ。

處女の臀部は、圓くして高く隆起し、之れに反して非處女の臀部は、扁大である。これ兩者の異なるところで、處女が異性に接するときは、豊隆なる其の臀部が、次第に扁くなつて來る。これは結婚すると、乳房が弛緩して來るのと、同じ理由である。

五 美の標準及び處女と非處女とに於ける美の比較

1 【先づ男女に於ける美の優劣を定めよ】

美としての人體は、性に依つて異なり、男は常に、女を美として之れを賞し、女は之れに反して、男を美なるものとして居るのは、美の感情が、性慾と伴ふからで畢竟、異性に牽引せらるゝ爲めである。

ヒューム氏は、美感は性慾と伴ふもので、獨立して存することは少ないと言ひ、シヨツペンハウエル氏も、男が女を美人として、花の如くだの、月の如くだのと、之れを賞めたゞゆるのは、女を好愛する性慾の爲めである。本來から言へば、女は脚が短く、胴が長くして、不恰好なものであるけれども、男がそんなことには頓着

美の標準及び處女と非處女とに於ける美の比較

なく、其の姿を見て垂涎するのは、女といふ概念と、其の色慾とに牽引せられて、之れを美しく感ずるに外ならぬといふことを論じた。

それで果たして女が美しいか、將又男の方が美しか、其の美を批評して、眞の美を定むるには、性的感情の無い中性者といつた。やうなものでなくてはならぬ。併し人間で中性者といへば、去勢したものや、或ひは半陰陽の如き類のもので、その外には無いが、未ださういふ種類の者から、男女の美に就いて、批評した説を聞いたことはないから、それは除外として、廣く美人を批評した者の説を、綜合して見ると、婦人でも、眞の美は男よりも女にあるといふ者が、多くある。例へば女畫工女優、賣笑婦等の類で、彼れ等は同性だから、女を庇護するといふ譯でなく、何うしても眞の美人は、女に限るといつて居る。

或る女畫師は、恚ういふことを言つて居る。男にも男性美はあつて、女の曲線美とは、性質を異にして居るから、比較することは出来ないけれども、美の本質から言ふと、女の曲線美の方は、優しくして、美の性質に適つて居ると、賣笑婦なども女の美人の方は、好男子といはるゝ者よりも、氣高いと言つて居る。彼の女性同志で、戀愛の成立する者の如きは、決して單に、戀愛の壓迫から許り、起るものではないことは、言ふまでもない。特に處女時代に於ける同性愛の如きは多く斯うしたことから起るのである。

2 【文藝上及び人類原上より觀たる美人の批評】

斯くの如く美の本性は、婦人にありとして、然らば世界中で、理想の美人は何所の婦人なるかといふに、プロッス氏の説に據れば、最も優れた美人は、西班牙、伊太利及びポーランドの婦人であつて、殊に西班牙のアンダル州の婦人は、美術の最上なるものである。けれども美人の理想は、時代と共に推遷するものであつて、常に一定して居らぬから、同じ國にても、時代に依つて、其の見るところを異にす

美の標準及び處女と非處女とに於ける美の比較

るのは、古今の美人畫を觀れば明らかである。

これは歐洲にて、古代の彫刻又は繪畫に残された美人と、中古、近代又は現代の美人等と、比較して見ると、其の間に、大分異つて來たところのあることが分かる。例へば古代の希臘美人は、容貌凄艶、臀部狭く、下肋廣くして、男性的美人であつたが、現代は豐唇にして、下肋狭く、謂はゆる細腰を尙ぶやうに、なれが如き其の一である。

我が國でも、古昔の美人は、肉付き佳良にして、頤の圓く太りたる圓顔を、美人と囃したやうであるが、徳川時代に至つて、それが一變して、顔長く、體も細くして、唇の無いやうな者を、美人とするやうになつたことは、前に述べた如くである。然るに現代は亦、多少復古の傾きありて、豐頬、豐唇を稱し、柔和にして愛らしきものゝ方が、一般に好かるゝやうになつた。故に現代の日本美人は、美しい可愛いといふ點に於いて、優れて居る代はりに、凄艶の趣きが缺けて來た。芝居で演ずる

切られ與三郎の情婦、お富のやうな俠んな美人や、原田お絹、又は高橋お傳などのやうな 凄艶な美人は餘り歡迎せられなくなつた。

理想の美人は、凄艶にあるか、將又、濃艶にあるか、それは見る人に依つて異なるであらうが、處女としては初心で、優しい方がよい。或る國文學者の話に、國文に現はれた中古以來の美人で、人口に膾炙せる者を想像すると、清盛に寵せられた妓王や、佛や、常盤は、濃艶で、義經の愛妾靜は、凄艶であつたらしい。それから曾我兄弟と、深く契れる虎及び少將も、凄艶の方で、義貞の御臺勾當内侍は、濃艶のやうに思はれる。武田勝頼を慕ふ餘り、其の畫像を床に掛けて、搔き口説いた八重垣姫は、國文にはないけれども、傳説としては濃艶な方で、美人には違ひないが少し淫奔なところがあつて、處女としては好ましくない。

それはさて措き、西洋婦人が日本娘として、愛する美人の標本は、豐頬圓顔で、面長は好まないといふことであるが、これは歐洲の美人が、古代の嚴格なる男性的

美より優美なる女性的美に趣きが變つて、歐人の目が、一般に柔和なる容貌を、好むやうになつた點に於いて、日本婦人が、丁度彼れ等の理想とする典型に、適合する爲めであると、吾人は思考するのである。此の事實に依つて見ても、日本婦人は優しい、愛らしい方に於いては、他にひけを取らないと思ふ。

併し日本の美人は、容貌のみは優しいけれども、體格の方に於いては、西洋婦人に數歩を譲つて居ることは、前に言つた如くで、再び繰り返す必要はない。プロツス氏は、其の大著婦人論に於いて、日本婦人を恚う批評した。日本の婦人は、美人とは稱せられぬけれども、清楚として、支那の婦人よりは美であると。此の他にも日本婦人に關する、外國人の批評は多くあるが、之れを要するに、最上の美ではなく、中位たるを免れぬ。

尤も此れ等の批評は、主に容貌を主としたもので、體格は問ふてないから、さほど劣つては見られてないが、若し體格と共に批評された場合には、二等も三等も劣つて來るに違ひない。

3 【婦人の眞美は處女にあるか、將又非處女にあるか】

茲に又、一の問題がある。それは處女と非處女との美で、眞の美は、處女にあるが、將又、非處女にあるか、之れを判斷することが必要である。

此の問題は、審美學と、生理學との上から、論じなくてはならぬ。審美學の上から言ふと、婦人の美は脂肪の豐滿にあるので、皮膚は脂ぎつて居る中にも、緊張して居らねばならぬが、非處女即ち既婚婦、又は他の異性に接觸した婦人等にあつては、性的關係の影響として、皮膚に弛緩を來たし、其の緊張した肉體に、崩れを生じて、美を損するものである。

前の、美術家のモデル觀（六五頁）の條に於いて、述べたるが如く、婦人の肉體に及ぼす性的關係の影響は、極めて大であつて、美術家はモデルが裸になると、これ

が處女であるか、將又非處女であるかといふことは、直ぐに解かると言つて居る。特に醫師の眼は敏くして、顔だけでも分かる。これは異性に接した者は、心理上の關係もあつて、起こるに違ひないが、其の結果の肉體に及ぼす變化は、一通りでないのである。

先づ其の變化を舉げて見ると、第一は頬、及び喉頭にして、次ぎは乳房及び尻部である。總じて到底他には見られないところの、柔かさと、無邪氣さが消えて、甚だしいのになると、全身に萎縮的形容を來たす者もある。これ性的行爲の劇烈なるものにして、美術家でなくとも、其の状態の一目して分かるものがある。例へば賣笑婦の如きは是れである。

かういふと實際、賣笑婦ほど、其の肉體の荒れて、柔かみと、温みの無いものはない。彼れ等の肉體は、全く枯木寒岩の如く、血の循環が遅くして、生氣が無い。これ彼れ等が其の身を、獸慾の犠牲に供して、亂暴に身を持ち崩すのと、眞の愛情

を味ふことがないとの、二原因からして、斯かる退行的變化を來たしたのである。

けれども彼れ等の身は、商品同様の賣り物である。賣り物である以上は、枯れたりと雖も裝飾を施して、人の目を惹かなくてはならぬ。そこで彼れ等は白粉や燕脂で、顔を塗り隠して居るので、夜目に見ると、美しく見えるが、素顔で見ると、頬肉は落ち、目は窪み、皮膚は全體に弛緩して、美を失つて居る。之れを美術家に批評させると、醜に屬するものであるけれども、嫖客の之れに戯るゝのは、其の美を愛すよりも、寧ろ其の色を好む爲めで、賣笑婦は美をもつて、論ずべきものではない。

此の點に於いて處女ほど、美なものはない。處女の肉體は、既婚婦又は賣笑婦等と異なり、弛みなき皮膚に光澤を添へて、生々として居る。且つ又、處女は、運動が自由であるから、身體は伸び／＼して、肢體の釣合ひも、よくなつて居ることは前に言つた如くである。故に處女はモデルとするには適當で、美を主とするモデル

は、必らず處女を選ばなくてはならぬ。

處女は、彼の世故に慣れて、愛嬌に富める主婦や、賣笑婦等の如く、情趣を目的とする男の氣には、入らぬとしても、美の上から言ふときは、崇高純美の極致として、處女を稱せねばならぬ。處女は其の情趣よりも、又は弄びて面白いといふ點よりも、寧しろ高尚優美なるところに價値がある。

第三 處女の性的方面に關して

一 處女の戀愛と性慾

1 【性的生活に入るの序幕】

予は、本書の第一に於いて、處女の生理、心理及び病理等に就き、其の嫁入り前に、心得べき事實を示し、それから第二の美的方面に關して、美としての處女の價値は、高尚優美なる點にあることをもつて、其の結びとなしたが、此の外にも處女に就いて、見逃すべからざるものが多くある。

それは何かといふに、性的方面に關する問題である。即ち戀愛及び性慾にして處女は初めて愛情を、夢の如くに感じ、それが強き刺戟物に撞着して、戀愛を實現し、茲に初めて性慾を生ずるのである。語を換へて之れを言へば、精神的から、肉

體的となるのである。これが一般に、處女に來たる性的生活の序幕であるが、時としては戀愛よりも、性慾の方が先きに來ることもある。之れに就いて某醫學士は恁う言つた。

早發性の處女になると、性慾の満足を得んとして、種々な手段を講じ、其の手段として、最も手近い間接な方法で、満足せんとするものがある。若しも此の時期に於いて、性慾を濫用することがあると、生涯不幸に陥りて、回復の出來ないことになつて了う。自瀆なども習慣的になつて來ると、頭腦の發育を妨げ、記憶を保つことが出來なくなつて、生來健康状態な者も衰弱し、外界の刺戟に堪へられなくなつて常に鬪ぎ勝となる。これは其の人のみに止まらず、子孫にまで悪影響を及ぼすに至るのであると。

處女時代に來たる比斯的里、又は精神病の如きは、多く狂烈なる戀愛に囚はれて之れに熱中し、或ひは失戀に陥つた結果である。

箇様に處女時代は、戀愛に捉はれ、又、性的生活に觸れ易くあるから、十分に警戒しなければならぬ。何を言ふも處女時代は、すべてに對する愛の情が、強烈にして、動もすればそれが戀となつて、其の人を深く、思慕するやうになるのである。故に處女の戀愛は、遊戯的のものであるけれども、注意しなければ、それが爲めに墮落することもある。或ひは又、濃厚な友情から、同性愛となつて、離れ難くなることもある。

箇様にして處女は性的生活に入るのであるが、それまでは、固く戒めて、飽くまでも身を、純潔に保つことを教へなくてはならぬ。

2 【處女の感情と戀愛】

感情に於いても、處女の感情は劇烈にして、空想に耽けることを喜ぶので、それが若し戀愛と合するときには、一層強烈となつて、間達ひが起こり易くある。人口に

膾炙せる八百屋お七の放火は、小姓の吉三に對する、狂烈なる戀ひの動機で、清姫の化蛇は、安珍に對する失戀の、妄念であることは言ふまでもない。

人智が進んで、男も女も伶俐になつた今日では、最早、お七や清姫のやうな、愚かしき者は、出ない筈であるが、それは大間違ひで、今日はお七以上の者や、清姫どころでない者が、數限りなくある。日々の新聞に出る娘の放火の裏には、失戀又は強烈なる戀ひの、壓迫から餘儀なくされた者が多くある。其の放火の動機を辿つて見ると、お七に類似して、年も十六七歳の妙齡の處女が多い。之れに關する數多の實例を、予は蒐集してあるが、長くなるから茲には擧げぬ。

又、情夫斬り、或ひは情夫殺しなどの記事も、新聞に掲かることがあるが、勿論情夫を持つ位だから、處女とは云はれないが、初戀のまだ苦勞を嘗めぬ娘心に、男の玩弄となるを知らず、唆かされて契りたる男に、見捨られたるが殘念さに、寢及を加へて、法廷の人となつた例なども、數多くある。或ひは又、意中の人が、我が

情を酌み分けず、つれなくもてなされたが口惜しく、身を投げて死んだといふやうな、悲劇も少なくない。何れにしてもお七、清姫以上の強烈さで、新聞が賑かされて居る。

古昔は、唯た一人のお七で、江戸中を騒がした。唯だ一人の清姫で、女の一念の恐ろしいことを、今更のやうに觀せしめた。これで見ると、昔の處女は一般に、つしましやかで、嗜みがよくあつたやうに思はれる。徳川三百年の中で、性的犯罪で名を響かした者は、少なくないが、併し之れを今日に比すれば、九牛が一毛にも足らぬ。例へば白子屋お熊母子、霞のお千代、お富などは、其の中の尤なるもので、罪惡はと言へば、姦通と殺人とが主で、殺人は何れの場合に於いても、死刑は免れぬが、お千代、お富等は當時の峻酷なる刑律の、犠牲となつて、磔刑に處せられたが、今日ならば有期懲役に相當するお熊をも、姦通と殺人教唆との罪に問ふて、之れを獄門に處したのは、彼の女を名高くして、今日まで之れを謳はしめた所以であ

る。

少数者の罪惡を、長へに傳へて、深き印象を、國民に與へたのは、全く刑を苛酷にして、而かも其の刑を見せしめの爲めに、衆人環視の中で、公開した爲めである。これは全く當時幕政の失策で、それが爲めに却つて多くの犯罪者を出だし、毒婦を出だしたのである。

凡そ何が最も強く、印象を與ふるかといへば、百聞一見に如かずで、實驗ほど深刻に、腦を刺戟するものはない。首斬りや、磔や、火あぶりや、名を聞いた許りでも戦慄するが、それを眼のあたり、見る人の心は何うであらう。慘絶、凄絶、言ふべからざる不快が、深く／＼腦に浸潤して、忘れんとして、忘るゝことの出來ない印象が、何時までも残るに違ひない。併し心理學の言ふ通り、何事にも暗示といふものがあつて、悪いことをして殺されるところを見ると、其の殺されるといふ觀念よりも、其の惡事を辿つて來た徑路の方に、觀念を唆つて、同じやうな罪惡を犯す

やうになるから、列罰の見せしめの公開は、絶対に禁じなくてはならぬ。

支那の清朝時代にて、姦通者を刑するには、大道、而かも往來の最も頻繁な巷路に男女を引き出だして、裸體のまま、之れを柱に縛し、而して割手は銳刀を閃めかして、身體を少しづつ、斬り取つて、全く爛り殺しにするのであるが、之れを見て他の姦婦姦夫が、改悛するかといへば、必らずしもさうでないと見えて、姦通が到るところに行はれ、捕まれば殺される覺悟で、夫の目を忍ぶ者が、絶えないといふことである。

3

【如何にして處女の感情を融和すべきか】

之れは枝葉に歩つたが、要するに悪人や、毒婦の名を大きく、後世に傳へたのは其の罪よりも、刑の方が重く、殘酷を極めた爲めである。それで一人のお七の爲めに昔には戀愛狂が、多くあつたかのやうに、印象せしめたのである。

そこで人智が開けると、戀愛に浮かされて、無分別を起す者が、少なるならんといふ考への、誤つて居ることが解かる。若し戀愛及び性慾が、人智をもつて抑制することの出来るものならば知らず、本能として知識、及び道德の範圍外に、超越して居る以上、何所に何ういふ間違ひが起るか知れぬ。といつて放棄して措く譯でないが、其の抑制が實際難しくある。

勿論、戀愛及び性慾は、知識及び道德をもつて、或る程度までは、之れを抑制することが出来るけれども、それも餘程人格の高い、意志の強い者でなければ難かしくある。孔子が、戀を思案の外といつたのは名言で、戀の爲めには、知識も、道德も暗くなつて、分別に迷ふことが多い。而して其の感濁は、特に處女に多くあるがそれは畢竟、處女の感情が激烈にして、極端に走り易い爲めである。

それで處女時代に於ける、此れ等の危険を救ふには、家庭に於いても、又は學校に於いても、力めて處女の感情を和らげて、激變しないやうに馴けなくてはならぬ

さうするには親の温情、又は兄弟姉妹間に於ける、愛情の交換などが適當である。處女の感情を和ぐる、第一の手段はこれで、若し家庭で父兄の愛が薄かつたり、兄弟姉妹の愛が冷かであつたりして、仲が悪いと、常に感情が衝突して面白くないから、自然愛を家庭以外の人に向つて、要求せんとするやうになる。それが嵩ずると戀愛となり、或ひは同性の愛となるのであるから、家庭に於いて父母兄弟の、温かい愛の泉に浴せしむることが必要である。

之れが處女の感情を和げて、極端に走らしめない方法である。さうして異性と交際に就いては、精神的を主として、飽くまでも處女の純潔を保つべきことを、學校に於いては、倫理の講義の際、家庭にあつては、父母の座談の場合にでも、しみじみと其の意の徹底するやうに、説き聞かすがよい。

二 處女の誇りとしての操

1 【操の意義】

尙、處女の戀愛と關聯して、離るべからざるものは、操である。操は婦人の誇りで、操の正しき婦人は、貞女として尙ばるゝけれども、取り分け處女は、操の化身ともいふべきもので、最も大切である。處女の處女たると、非處女たるとは、唯だ一の操に依つて定まることは、前に屢々説いたところで、處女の問題は、即ち操の問題に外ならないのである。

ところで此の操といふものは、如何なるものであるか、人のよく言ふ割りには、其の意義の徹底してないところがあるから、予は先づこのことからして、之れを説述しやうと思ふ。

操に關する事實を、廣き意義の上から言ふと、二種に分けることが出来る。即ち

- 一 處女の如く、異性に觸れたることなくして、純潔を保つこと、
- 二 或る異性に對して、契りたる者に、其の身心を捧げて、他の者には一切許さいること、

であつて、前者は處女の操、後者は妻女の操とでも、謂ふて宜からうと思ふ。

操に就いて、昔から多く議論のあるのは、右の如く二つの意義があるからである。操を唯だ一つ、處女の誇りの如きものとすれば、世の中の妻女には、操を有するものが、一人も無くなる譯である。何となれば人の妻となり、又、母となるには、處女で無くならなければならないからである。語を換へて之れを言へば、處女の誇りを棄て、人の妻となるからである。第一義の操といふのは、即ち處女である。處女から人の妻となるには、其の操を破棄しなければならぬ。

併じ第二の意義から言へば、妻女は既に、第一義の操（處女たる）を破つて、第二義の、新なる操を立つることになる。結婚は處女の操を、捨つることを公然許し且つ爾う爲さしむる儀式であつて、之れが家庭に重きを爲し、社會の秩序を保つこととなる。

結婚の儀式には種々あるが、何を差し置いても、第一に新夫婦を祝ふのが、三々九度の杯となつて、夫婦の固めをすることである。夫婦の固めとは言ふまでもなく夫婦として、同棲すべき契約のことで、そこに神秘なる、性の導びきが、神の御教へとなつて、吾人の祖先から、代々の家を傳ふて、それが一の儀式となつて來たのである。媒酌人の役は、特に性の導びきを努むるにあつて、父母、親戚、故舊、朋友、其の他人々の、之れを祝するのは、みな新夫婦の和合して、末廣がれと祈るに外ならぬ。

2 【結婚と操】

和合といひ、末廣といひ、これ一家の繁榮にして、一家の繁榮は、子孫の多く生まるゝにありとすれば、結婚は全く神の使命である。神の下し給へる性の解決である。斯くして處女は、處女にあらざる身となるのである。

斯くの如く結婚は、神の使命であると同時に、處女の操を棄て、新らしき生活に入る秋である。併し其の操は、更に新らしき操となつて、現はれて來るのであるから、操其のものには變はりが無い。語を換へて之れを言へば、處女の操が、結婚に依つて、妻の操と變じたまでのことで、其の性質は同一である。併しながら何ものに對しても、純潔なるべき處女の操が、夫といふ一人者に依つて、占領せらるゝことになるから、妻の操の方が、處女の操よりも、責任が重くならねばならぬ。

これは何ういふ理由であるかといふに、結婚は夫が妻の身體、生命及び其の養育

等に關して、保護と、安全とを期する責任を有し、妻は之れに對する義務として、夫の命令に服従する契約の下に、成立したものであるから、妻は夫に對して、理由なく其の同棲を拒み、或ひは夫の目を忍びて、密かに其の操を破るが如き、不貞の行為は出來ないのである。

處女の操は純潔無垢にして、一點の汚れなきところに、價値があるけれども、責任はないのである。これ定まれる夫がないからで、責任がない代りに、あらゆる異性に對して、其の操を保たなくてはならぬ。故に之れを無差別的操と謂ふことが出来る。然るに妻となれば、夫以外の異性に對して、操を守らなければならぬから、有差別的操と謂ふべきである。

箇様に無責任であつた處女の操から、責任のある操となつた妻は、夫と夫婦關係の、繼續して居る限りは、如何なる事情があるとも、妻は其の操を破ることは、絶對に出來ないのである。若しそれがあつた場合には、注律上の問題となつて、破貞の

汚名を着た上に、離婚は免れないところであるが、併し事情に依つては、第二義の操（現在の夫に對する操）を棄て、更に第三義の操（再婚したときの夫に對する操）を、立てなくてはならぬことが出來、それが亦、實際に許さなくてはならぬこともあるであらう。

之れを例へて言ふと、茲に初めて結婚した新婦が、不幸にして夫に死に別かれた場合の如きである。長い年月連れ添ひ、且つ子寶も多くあつて、老後の樂しみのある者は、夫に別かれたからとて、其の子供を置いて、其の家を去る必要はないし、亦、さういふことをしないで、後に止まつて、何處までも子供を育て、行く方が人情である。のみならずそれが亡夫に對する徳義であるが、併しまだうら若い嫁で、子も無く妊娠もしていない者は、佛に仕へる爲めとはいひながら、之れを後家として、縛つて置くことは、人情として忍びざるところである。それ故さういふ嫁に對しては、相談づくで離縁することが、嫁に對する慈悲であるし、亡夫も草葉の蔭で、却つて之

れを喜ぶであらう。

簡様にして再婚するときは、此の婦人は先夫に對して、其の操を失ふことになるが、現在の夫に對しては、新に操を守らなくてはならぬから、其の操は先夫に對するときと、變はりなく、随つて其の妻は、操を破つたことには決してならぬ。そればかりでなく、不幸にして又も其の夫に別かるゝときは、更に第三の夫に、見えなくてはならぬこともあるであらう。世の中には随分薄縁にして、嫁ぐ先き〳〵の夫に別かれて、無情を感じ、遂に獨身で暮らして居るといふ女もある。

して見ると第四の夫から、第五、第六と、夫を迎へる者もなくはなからう。其の都度新らしい操が、それからそれと湧き出て、流石に淺ましく思はるゝであらう。併し事情の已むを得ざる場合に於いては、新らしい操を遂ふこと、必らずしも咎むべきでない。世人は斯かる者は、淫婦なるが故に、夫を重ねるといふけれども、生理上の影響は別問題として、新道德の上からは、問ふところがなからうと、吾人は

思考するのである。何となれば餘儀なき事情にて、再婚又は再々婚をするとも、其の操に於いて缺くるところがなければ、再婚は愚か、三婚も敢て批議すべきでないからである。

但し再婚は、第二義の操を棄てて、第三義の操を守り、三婚は第三義の操を破つて、更に第四義の操に移るのであるから、舊道德に養成せられたる婦人、又は之れを遵奉する種の者は、之れを無節操として、今日も尙、之れを嘲る者が多くある。

斷つて置くが、此の操を棄て、或ひは破るといふことは、茲ではわが妻ならぬ妻を重ねる意味の、破操ではなくして、已むを得ざる事情の下に、離婚となつたものが、再婚又は再々婚して、新らしき夫に見えたときのことを言ふのである。それで再婚は勿論、再々婚も、決して不名譽とはならぬ。

三 處女と結婚

1 【結婚と生殖】

何と言つても、生殖は人間の一大事業たるに相違ない。これは、人間一般のこと
で、處女のみに向つて言ふのではないが、併しながら晩かれ早かれ結婚して、人の
妻となり、やがては母となるべき、天職を帯びて居る處女として見れば、結婚の考
へはもつて貰はねばならぬ。

元來女は、男よりも早く結婚思想を抱くもので、結婚については、餘程苦心する
ものと見える。もう女學校の半ば頃から、そろ／＼此の問題が、頭を擡げて、小
き胸を悩ます者がある。或ひは私の理想はかうだ、あゝだと云ふ者もある。それは
決して悪いことでない。人間一度は必らず結婚すべきに極つて居る以上、特に結婚
期の男よりも早くなつて居る女が、男のやうな考へで、結婚問題を度外にしておく
譯に行かぬ。

親も娘に就いては、十分努力してやらねばならぬ。まだ小兒だ／＼と思つてる中
に、もう直ぐ結婚の時期が来る。この時期を外すと、縁遠くなつて、女の一生を誤
まることがあるから、年頃になつたら、それ／＼力を盡くして、嫁けてやることを
しなくてはならぬ。これが親の義務である。

併し結婚は、人間一生の大禮であつて、幸福と不幸との岐れ目となる關門である
から、決して輕々しくは出来ない。配偶者の選擇には十分に念を入れて、缺點のな
いことが判然つた上でなければ、儀式を擧げてはならぬ。一度結婚した上は、其の
家を死場所とせよと、昔の人が戒めた心がけで行かなくてはならぬ。結婚は一寸遊
びに行くのではない。已むを得ざる事情で、離るゝのは仕方がないが、離縁といふ
ものは、兎も角女の不幸であるから、末を遂げるやうに心掛けなくてはならぬ。

それにはあらかじめ、配偶者を十分に選擇するに限る。離縁といふ不祥事の起こ
るのは、畢竟選擇を誤まることから出るのであるから、呉れ／＼もそれは注意しな
くてはならぬ。

それから處女は、結婚に就いて、考へをすると同時に、妊娠は何うして起こるものであるか。子は何うして胎内で成長するか位ひのことも、知つて置く必要があるのである。子供の生まれるのは、父母の盲目なる色慾の結果にして、其の際には子供の事など、念頭に懸けてないといふこと、これが恐らく人類一般の性情であること、シヨペン、ハウエルの言つたこと、併し父母が念頭に掛けて無くとも、自然の原則として、適當な結婚をしたものからは、善良な子が生まれ、之れに反して不當な縁を結んだものからは、不良な子の生まれるやうになつて居ることなども、知つて置く必要があると思ふ。

吾人が常に個人の爲め、又は社會の爲めに、結婚に重きを置くと同時に、生殖に大なる注意を拂ふべきことを、鼓吹する趣意も、之れに依つて了解されたいのである。

2 【結婚思想の男女に依りて異なり且つ女子の早く

此の思想に染むる原因】

結婚は、女子の常に、理想とするところのものであつて、其の思想の現はるゝのは、頗る早期に於いてし、而して破瓜期に至つて、著しくなるのであることは、前に言つた如くである。語を換へて之れを言へば、結婚思想は破瓜期に於ける、處女の一徴候にして、此の點は、男子よりも遙かに發達して居る。男子は小兒の際は勿論、發情期に至つても、結婚に就いては、未だ思念するまでに至らぬが、女子は幼稚のときから、結婚を思ひ、或ひは之れを想像して、頭から離るゝことはないやうである。

簡様に結婚思想の、男女に依つて異なるのは、男子の生活は外的にして、主に學業や、運動や、すべてさることの方に身を入れ、之れをもつて將來の計を爲さんとする考へが、學生時代から浮んで居るから、結婚を思ふ違がないのであるが、女子は之れと異なり、其の生活は內的にして、家庭を整理したり、又は一家の主婦として、働くといふ考へを、先天的に含んで居るので、幼少の時から、結婚思想に富んで居るのである。

斯くの如く女子は、先天に結婚思想に富んで居るので、遊戯にも、之れに觸るゝ遊びを爲すことが多い。これは何れの國に於いても、古昔から、性的思想を現はした、お伽譚の類が多くある爲めもあるが、女子は先天に其の思想を、餘分に賦與せられて居るから、機に觸れて、筒様な遊びをするのであると思ふ。若し女兒の結婚思想が、此れ等のお伽譚のみから、感化されたものとするれば、男兒も之れと同様に、結婚思想に觸れて遊びを、爲さなくてはならぬ理であるが、さういふことのないのは、本來其の思想が弱いからである。

それ故に男子は、破瓜期に達して、性慾の發動を見るときになつても、結婚思想は比較的冷淡にして、之れが爲めに心を苦めるやうなものは少ない。然るに女子の方は之れに反して、早期より結婚思想を宿して、將來を慮る割合には、戀愛の情を早く直接に味はんと欲するが如き情が少ないやうである。茲が男子と異なるところで、破瓜期に於ける男子は、結婚を冷視する割合に、戀愛を直接に味はんとする情が、強くある。

3 【如何に結婚問題を解くべきか】

結婚の問題は、女子時に處女の問題であつて、男子よりも、女子に重く觀られて居ることは、前に言つた如くであるが、結婚の様式や、其の種類は、極めて多くして、人類學的にも、社會學的及び醫學的にも、種々の見方がある。併し結婚の目的は、優良なる子孫を繁殖すべく、人生の大禮を擧ぐ點にあるので、其の幸福といふ點を主として言へば、之れを二種に大別することが出来る。即ち、適當なる結婚と、不適當なる結婚とで、前者は又、幸福なる結婚ともいひ、後者には不幸なる結婚の名がある。

如何なる結婚をもつて、幸不幸又は、適不適といふか。此の區別は、夫婦の和合すると、否やとに依つて定めたのであるが、一家の和合は、單に夫婦の愛情許りで求め得らるゝものでない。勿論、愛情なるものは、和合の基礎には違ひないけれど、夫婦としての年齢、體質、心性、教育乃至は其の財産、若しくは家族的關係等も、與つて力のあるものなるに依り、此れ等の點も、能く考へなくてはならぬ。

それ故に、戀愛から成り立ちたる夫婦であつても、結婚後負傷を爲して、生まれも附かぬ不具となり、或ひは疾病に罹かる等のことあるときは、不人情にも急に厭氣がさして、之れを冷待するやうになるものが、少なくない。或ひは又、家政の衰頹より、そこに思ひも寄らぬ障礙が起つて、破鏡を來たすが如き、破目に陥ることなどもあり勝である。小説にもあることであるが、許嫁の間にてありながら、嫁の里方が失敗して、財産を無くした爲めに、約束の許嫁を破つて、他の財産家から嫁を貰つたとか、或ひは又、嫁方にも、婿の家の零落したので、口實を設けて、娘を他の資産家に、嫁がせたといふやうな、冷酷無情なものが少なくない。

昔時の、若い者同志の間にては、互に思ひ思はれてさへ居れば、深山の奥にて、手鍋さげても、末遂げられたかも知れぬが、今日の社會にては、斯かる幼稚なる思想は、到底世に容れられざるのみならず、實際に於いても、極めて不適當である。何となれば今日の結婚は、結局生存競争の活社會に於いて、勝利者とならんが爲めに、行ふものであるからである。此の際其の結婚が、幸福となるか、それとも不幸

に終はるかば、豫め測り知ることが出来ないけれども、兎も角も、異性相互の共同協力を依つて、利益を得る爲めに、行ふものにして、單に理想の戀愛を、實現せるといふが如き、單純なものではないのである。

それ故に、暫らく歡樂に酔ひたる、新婚の夢の醒むると同時に、早くも襲ひ來るものは、現在に於ける生活問題である。未來のことは未來として、現在に於ける我が自身、並びに一家をば、如何に處し、又、如何に導びくべきかといふ刺戟が、環境より犇々と、押し寄せて來るのである。此の時に當たりて、これに對する相當の覺悟のあるでなければ、狼狽して、今更に、身の不幸を悔ゆることが、生ずるのである。

是れに由つて之れを見ても、結婚は輕々しく爲すべきものではない。十分に注意して、取り決めた結婚ですら、時としては後に至つて、不幸を見ることがある。況して遠き慮りもなく、唯だ一時の戀愛に驅られて、結婚を爲したる者、或ひは初めより氣が進まぬが、義理にからまりて、餘儀なく結んだといふやうな、結婚の如き

に至つては、何う見ても、幸福の得らるゝ理がない。

右の理由に依り、如何なる結婚が、果たして幸福であるか、將た不幸であるか、次きに之れを説述して見やうと思ふ。

四 適當なる結婚と不適當なる結婚

1 【適當なる結婚の條件】

適當なる結婚、即ち幸福なるべき結婚といふのは、如何なるものなるか。これは次きの條件を具へたもので、それに缺けがあつてはならぬ。即ち、

- 一 年齢 結婚年齢に達して、身體の成熟したものでなければならぬ。而して其の最も適切なるものは、夫婦の年齢の差の、甚はだ懸隔しないもので、婦の年齢は、夫より五歳以上十歳以下、少ないものでなくてはならぬ。
- 二 體格 無病健康にして、身長之れに適ひ、絶対に悪しき遺傳質を有してはならぬ。

三 容貌 成るべく秀麗にして、男子は男性的風采を備へ、女子は女性的優美を有しなくてはならぬ。

四 品行 端正にして、花柳の巷に遊び、或ひは不義の快樂に耽りたるが如き行爲の、絶対に無きものでなくてはならぬ。

五 心性 善良にして、愛情に富み、同情心深くして、男子は豪毅果斷、女子は貞淑にして、才能を有しなくてはならぬ。尙、男女とも、勤勉にして、藝術に達し居れば、此の上なしである。

六 教育 結婚して一家を持つに、差し支へなき、教育の有るものでなくてはならぬ。且つ成るべくは、同趣味のものなるを要する。

七 身分 必らずしも身分の貴きを望むのではないが、確乎したものでなければならぬ。たとひ貧困であつても、又は孤獨であつても、構はぬが、唯だ意志の強い、目的のあるものであれば、差し支へない。何となれば心の薄弱なるものは、貧困に陥るときは、得て鈍になつて、心までが卑しくなり

之れに反して身の富貴に居るものは、心が驕慢に流れて、自然墮落し易いからである。

八

精神修養 斯かる者は、孰れも一家を持ちて、世に處ることが困難である。是れに依り、如何なる職業のもので、精神の修養を積んだ忍耐力に富んで居るならば、夫として見込みがある。

九

家累 家族との關係に於いて、蟠まりの無い者が適當であるが、併し一々獨身者とばかり、結婚するわけに行かぬから、舅姑のある家に、行く覺悟をして居らなければならぬ。別に多人數であつても、構はないが、唯だ憂ふべきものは、繼母の姑である。繼母の家にては、新夫婦と折り合ひの附かないことが多くある。

2 【不適當なる結婚の數々】

不適當なる結婚、即ち不幸なる結婚とは、體格の不良なるもの、疾病あるもの又は遺傳病若しくは、其の素質を有するもの等、すべて一身及び其の系統に、瑕瑾

を有するものとの、結婚を謂ふのである。之れを生理學上より言へば、此れ等は生殖不適といつて、子孫に其の病毒を遺傳する恐れがあるので、結婚當座はよくても後に至つて悔悟することが、多くある。

尙、身體には異常がなくとも、其の心性の不良なるもの、或ひは操行の修まらざるもの等の如きも、不安であるのみならず、子孫に其の性格を遺傳することが、多くあるので、斯くの如きものとの結婚も、避けなくてはならぬ。

それで不適當なる結婚の種類は、頗る多くして、一々枚舉に遑ないが、其の主なものを列舉すれば、疾病あるもの、變質徵候を有するもの、遺傳素質を有するもの、酒客、不品行なるもの、年齢の甚はだしく、懸隔せるもの、身分の釣り合はざるもの、愛情なきもの、嫉妬の烈しきもの、心性の良からぬもの、虚榮好きなるもの、無能なるもの、教育なきもの、趣味及び思想の相反せるもの、血縁を有するもの等である。

右の各項に就いて、一々説述するときは、甚はだ長くなるから、其のうちの或る

ものに就いて、話すことにする。

3 【疾病あるものとの結婚】

此の疾病を有するものとは、或る疾患に罹られるもの、謂ひである。そも世の中に、何が最も不幸なるかといふに、疾患に超すものはない。故に若し誤りて、傳染性の疾患を有するものと、結婚するときは、それより我が身に傳染して、互に苦惱することゝなるのは、無論である。特にそれが、遺傳性を有する疾患であるときは、其の病毒は子孫に遺傳して、罪なき子孫までも、苦しめなくてはならぬ。例へば梅毒、結核病、若しくは精神病等の如きものにして、此れ等患者の子孫は、先天に其の素質を享けて、同じ患者となるものである。

縦し、傳染性又は遺傳性を、有するものにあらずとしても、一方に疾患あるときは、病死せぬまでも、病褥に苦呻して、醫藥に親しむ結果、家庭は秋風に閉ざれたるが如く、圓滿を缺きて、遂には破鏡の悲しみを見るに至ることがある。

是れに依り、次ぎの疾患、及び其の素質を有するものとは、絶対に結婚を避けな

くてはならぬ。此れ等は多く、慢性の経過を取りて、進行することが遅いので、初期にありては、往々にして、其の罹病を、知らずに経過することがある。注意しなくてはならぬ。

- 一 花柳病 梅毒、軟性下疳、及び痲疾の總稱にして、同患者との接觸より傳染するものである。
- 二 呼吸器病 主なるものは肺結核にして、數年に亘ることが多い。
- 三 循環器病 心臟瓣膜病、心臟瘰癧等。
- 四 泌尿器病 腎臟病、尿毒症等。
- 五 生殖器病 男子にては辜丸炎、副辜丸炎、攝護腺炎、陰囊炎、其の他陰基の諸病等。女子にては子宮病、卵巢炎、喇叭管炎、其の他陰部に渉る疾患等。

六 癩病。

七 腦病 腦梅毒、腦腫瘍、腦膜炎、腦貧血、腦充血等。

適當なる結婚と不適當なる結婚

八 神經病 末梢神經疾患、運動神經痙攣、神經痛等。

九 精神病 癲癇、舞蹈病、ヒステリー等。

十 中毒 酒精中毒、莫爾比涅中毒、水銀中毒、鉛中毒等。

此の中慢性の花柳病、癲癇、精神病及び酒精中毒等の如きものは、寧しろ結婚を禁じて、其の種を貽さないやうに、する義務があらうと思ふ。

北米のインディアナ、カリフォルニア其の他の諸州にては、斯かる疾患を有するものに對する、法律を制定して、其の結婚を制限し、或ひは全く斷種を圖るところもある。我が國には、未だ斯かる法律は制定されて居ない爲めに、如何なる疾患を有する者にも、結婚を爲すに差し支へがないけれども、一たび思索を、我が身の上及び子孫のこと等に及ぼすときは、徳義として、自ら其の結婚を避けなくてはなるまい。それを知らぬ顔に、敢て結婚を爲すものは、道德の罪人と謂ふべきである。

4 【變質徵候を有し、又遺傳素質を有するものとの結婚】

變質徵候とは、身體に何か變つた特徴を有するもの、謂ひで、これは嘗だに、外

貌を損するのみならず、其の心性の上にも、變はりがあるので、人の嫌らうところである。例へば手の指が、普通より多かつたり、少なかつたり、或ひは耳や、目や齒が、尋常でなかつたり、頭の形が變つて居るもの、如きで、さういふ者は、世間に可なり多くあるが、世の人は、餘り注意してないやうである。

何故、變質徵候を有する人は、不可ないかと申すに、これは精神病性、又は犯罪性關係があつて、變質徵候を有する者には、精神病なるもの、或ひは犯罪性のものが、多いからである。それで有名な伊太利のロムプロゾーといふ犯罪學者が、犯罪者には變質徵候の多くあることから、犯罪定型といふことを創見した。

併しロムプロゾー氏の此の説は、悉く學者に信用されて居らぬ、けれども、變質徵候と性格とは、何等かの關係のあることは、否むべからざるところであつて見れば、さういふものと結婚することは、避けるに如くはない。

それから遺傳素質を有するものとは、父母に精神病、又は酒毒等を有するもの、謂ひである。たとひ父母には無いとしても、其の兄弟、姉妹又は父母の兄弟(伯父、

適當なる結婚と不適當なる結婚

叔父)、姉妹(伯母、叔母)、尙、祖父母及び其の兄弟(祖伯父、祖叔父)、姉妹(祖伯母、祖叔母)等に、精神病を有する者があるときは、遺傳素質の疑がひがあるから、注意しなくてはならぬ。

此の遺傳遺傳素質には、濃淡の差があつて、父母及び他の家累に精神病を有するものを、濃厚とし、父母には無くして、單に兄弟姉妹にある位のもものは、淡薄な方である。

5 【酒客又は不品行なるものとの結婚】

酒客とは、常習性に酒を飲む者を申します。抑々酒の害は、實に恐るべきものであつて、啻だに之れを飲む者を、害する許りでなく、其の毒を子孫にまで傳へて、癲癇、比斯的里、白痴、痴呆等の如き、種々の精神病者を、造り出すことは、醫學上の實説である。酒客に子を有せざる者の多くあるのも、酒精が、生殖機能を妨ぐる爲めで、男が酒客な場合には、其の男が不妊となり、又、女が酒客な場合には、其の女が不妊となることが、多くある。

酒が啻だに、精神病の遺傳、又は不妊の原因となるのみならず、經濟を狂はして一家の生計を危くすることの多くあるは、みな人の知るところである。金持ちが貧乏になるのも、眞面目な息子が、放蕩になるのも、みな酒の爲さしむる業で、親子喧嘩、夫婦別かれ等、數へ來たれば、あらゆる世間の不祥ごとは、大抵酒が手傳ひをするのである。

酒飲みの夫を、持つ女は、天から不幸と覺悟せねばならぬ。酒飲みの家庭の、よく治つた例はない。

酒飲みと、徑庭のない厄介者は不品行である。花柳界に出入して、花を手折つたり、柳を攀つたりするものには、花柳病の恐れがある。たとひ現在に於いては、斯かることがないとしても、一度墮落したものは、花柳病は附きものになつて、數年の後に、突然發生することがある。新婦が間もなく、忌はしき、病に冒さるゝことあるのは、夫の病毒を受けた爲めである。これ花柳病は根治し難くして、永く病毒を止めておく爲めであるから、注意しなければならぬ。

適當なる結婚と不適當なる結婚

又、たとひ悪疾がないとしても、品行のよくないものは、結婚しても其の心が荒んで、妻を虐待することが多くある。

6 【年齢の甚だしく懸隔せるものとの結婚】

これは老人と小娘、又は老婦と少年といふが如く、年齢の非常に懸隔したものと結婚することを申します。其の結果は、生理上極めて不良にして、第一に家庭がよく治まらざるのみならず、子供を擧げることとも困難である。それは如何なる理由なるか、要するに年齢の懸隔より生ずる、生殖の不適であつて、生殖細胞の不適合に歸因するのである。

一體夫婦といふものは、其の性格の相合ふところに依つて、初めて苦樂を共にし偕老同穴を契る心も起るのである。一方が老年にして、一方が若いときは、性格や、趣味の異なるところからして、嫉妬心或ひは猜疑心などが起つて、それがそもく、不和の原因となることが多くある。

尙、夫婦の間に、子供の無いのも、不和の原因となることが多くある。幸ひにして子供が生まれても、老年の夫と、若い妻との間に生まれた子は、之れを他の適當なる年齢の下に、結婚したものゝ子に比較するときは、惡劣なることは、私生子に勝るとも劣ることはない。

老夫と若い妻との、結果の不良なりと同じく、老妻と若い夫との結婚も、極めて悪しく、特に妻が四十歳以上なるときは、夫は若くとも、子供を擧ぐる望みのないことは、諦らめなくてはならぬ。

7 【身分の釣合はざるものとの結婚】

身分の釣合はざるものとの結婚、これも確かに、不適當なる結婚の一箇條である。諺にも身分の釣合はざるは、不縁の基といふ如く、結婚には、身分相應といふことが必要である。斯く言へば、人或ひは陳腐と笑ふかも知れないが、其の陳腐なるところに、間違つた例のないことを記憶せねばならぬ。

尤も多くの人の中には、藝妓が、一躍して華族様の夫人となり、紅葉館邊りの女

中が、一夜に富豪の奥様となり濟して、榮耀榮華に暮らして居るものもあるが、それは變態なる社會に行はるゝ、變態現象とでも謂ふべきものであつて、一般に適用せらるべきものでない。

それ故に、貧乏人と金満家との結婚の如きは、考へなくてはならぬ。何故といふに、釣合はざる縁は、多く不結果に終はりて、末遂げることが、極めて少ないからである。且つ斯かる結婚は、普通に多くはないけれども、金持ちの我が儘息子などが、一時の迷ひから、貧家の娘を、是非にと所望しながら、手活けの花と眺むれば直ぐに倦きが來て、無殘にも之れを捨て、顧みないといふが如き、輕薄兒が少くないから、釣合の取れざる家から、結婚の申し込みがあつたならば、先づ御免を被る方が、よからうと思ふ。

輕薄兒が、妻を見捨てることは、昔からの通り相場と見えて、物の本に之れを寫したものが多くある。支那にては、盛唐崔影が、閨人に代つて輕薄少年に答ふるの一詩は、よく此の情を寫して居る。

8 【愛情なきもの、及び品性の良からぬものとの結婚】

愛情は、夫婦を繋ぎ止むる鎖にして、或る人は之れをもつて、夫婦間を密着せしむる油に喩へ、又、或る人は、之れを夫婦の和合劑といつた。何れも同じ意味にして、夫婦の間を固着するに、缺くべからざるものであるが、夫或ひは婦の愛情の有無、又は厚薄に依つて、家庭が圓滿に行くか、行かぬかの問題が、決定せらるゝのである。

又、愛情のあるものは、嘗だに夫婦間のみならず、其の父母、兄弟、或ひは姉妹等に對する情も厚く、随つて他人に對する同情心も深いので、結婚するときは、よく其の人の心情を、取り糺した上にて、決定しなくてはならぬ。

次に、心性の良からざるものとの結婚は、特に注意しなくてはならぬ。たとひ學問があつても、能力があつても、心が曲つて、正直であいときには、決して人の信用を得ることが、出來ないから、結婚する前に、十分其の心性を調べなくてはならぬ。

之れに就いて、一つ注意すべきことは、人の心性は、境遇に依つて、變化する傾きがあるから、其の境遇を察することも、大に参考となる。此の下に列記せる境遇の下に育ちたるものは、餘程、考へなければ、失敗する憂ひがある。即ち、私生子なるもの、里子にて、育ちたるもの、貰ひ子にて、育ちたるもの、棄兒にて、育ちたるもの、浮浪して來たれるもの、實父あつて、繼母なるもの、實母あつて繼父なるもの、父母共に無く、祖父母の手にて、育ちたるもの、父母共に無く、伯叔父又は伯叔母の手に育ちたるもの、父母共に無く、兄の手にて育ちたるもの、父母が甘やかして、我が儘に育ちたるもの等之れである。

9 【無能なるものとの結婚】

精神病学の上より言へば、無能なるものには、白癡、痴愚、或ひは魯鈍等の如き種々の區別があるが、茲にては斯かる區別に構ひなく、何れにても普通人よりも、智力の劣れるもの、謂はゆる低能のことにして、不適結婚の一條件なることは勿論である。

斯かる無能者と結婚する婦人は、生涯貧困で終はらなくてはならぬ。恚ういふ例は、澤山ある。一々示さなくとも、人のみな了知するところであらう。

10 【教育なきもの及び思想の反對せるものとの結婚】

人の思想は、境遇と教育とに依つて、各々異なり、一致するものでない、けれども、其の思想の甚はだしく異なるものとの結婚は、宜しくない。例へば、高等教育を受けた女と、平凡な男との結婚、深窓に育ちたる令嬢と、無教育なる商人との結婚、高等教育のある男と、無教育なる女との結婚、趣味のあるものと、趣味のないもの、又は趣味を異にせるものとの結婚、謂はゆる新思想なるものと、舊思想なるものとの結婚等の如きものであつて、斯かる夫婦は、和合し難くある。

其の中にて、女の無教育は、他に大なる缺點の無い限りは、不縁となることが、少ないけれども、女の方に教育があつて、男の平凡なるときは、纏まることが、少ない傾きがある。前者の理由とするところは、男に女を感化する力がある爲めにして、よく夫の言ふことを、聴く女であれば、男はそれで満足するので、大抵の場合

は、圓滿に行くけれども、之れに反して後者の理由、即ち教育のある女にて、それと相應した男でなければ、之れを征服することが困難なるに依り、女は男を卑しめ嫌ひて、女の方から、離縁を取つて行くといふやうな、現象を生ずることが多くある。

又、たとひ、夫婦の思想が、一致するとしても、嫁と姑との思想が、著しく懸隔して、相合はざるときは、これ亦、不和の基ひにして、無理に生木を割かれるやうな、悲惨な目に逢ふことが、少なくない。舊時代の思想に、育つた頑固な姑と、新時代の教育を受けたる嫁との間には、得て衝突があつて、其の結果は、破鏡の悲しみを見るに至ることが多くある。

五 悲惨なる離婚と平和の秘訣

1 「離婚より起る損害は、男よりも女に多い」

予は現代の婦人に向つて、一旦嫁入りした以上は、夫の家を死處と定めて、幾ら

辛い目をして、生家に歸つて来てはならぬと、女大學式の教訓は強ひぬ。何故なれば婦人には婦人の天職があつて、之れを正當に果たす爲めには、他から干渉される理由がないからである。

併しながら離婚は、男女共に、一代の不祥事で、男に取つても、女に取つても、大なる不利益であるから、成るべくならは辛抱して、破鏡の悲しみを見ないやうに、夫婦ともに心がけなくてはならぬ。實際結婚といふものは、法律で定めたる、一定の約束の下に、相誓ひたる結合であつて見れば、謂はれなく離縁することが出来るものでもないし、又すべきものでもない。然るに昔から日本には、離婚が甚はだ多く、朝に娶つて、夕に出すといふやうな、輕率極まる離婚を爲す痴漢が到るところにあつた。

離婚の原因は、前に言つた如く、舅姑の氣に入らないで、起るものもあれば、又、夫の無情に基づくものもある。其の不利益は兩方にあつて、夫家にも、婦家にも、迷惑を被むること、一方でないが、併し之れを比較して見ると、其の女の

身に受くる方の不利益は、莫大にして、到底も夫家の比ではない。特に夫家に於いて、離婚を主張する場合には、之れをもつて却つて厄介拂ひと考ふるものがある。

そこで離婚の原因は、何であらうと、又、其の理非は、何れにあらうと、世人はさういふ理性的判断は差し措いて、直ちに古來の習慣に依るところの、舊道德的判断を下すので、離婚は何時も女の不利益に歸して了うのである。

此の舊道德的判断といふのは、女は一旦他家に嫁した上は、夫家を死處として、如何なることがあらうと、生還するなといふ、堅い固い道德に基づいた、教訓のことである。今日の如く何事も開明に趣いて、文明の思想の流れで居る時代に拘はらず、離婚に就いては、尙、昔の教訓を守つて、離婚の罪を、女に歸するものが多くあるのは、歎しい次第である。それで離婚になつて、實家に歸つて来る婦人があれば、何か不貞不義でも働いたか、左もさければ悪いことをして、遂ひ出されたもの位にしか思ふ者はない。何と情ないことではないか。

斯くの如く離婚は、全く婦人に對する、大なる恥辱である。言葉を換へて之れを

言へば、女は一度離婚せらるゝと、それが瘡痕となつて、生涯癒することが出来なくなるのである。その結果として、將來の幸福を滅却するは勿論、日蔭者となりて世を送らねばならぬ境遇に陥るものが、決して少小でない。幸ひにして再婚することを得るとしても、世人は之れを、瑕瑾者として、侮蔑の眼をもつて見る傾きがある。

離婚より生ずる悲劇や、慘話の甚は多くして、日本の小説や、劇に仕組まれた材料は、殆んど離婚で、之れを観ると、日本人は不完全なる家庭の上に立つて、暴慢な舅姑や、夫に、壓制せられて居るやうな、感じがいたします。其の弱いものは新婦で、強いものは姑である。其の姑の新婦を虐待して、之れを遂ひ出した小説は數へ切れぬほどある。

併し小説は、架空の談であるから、當てにならぬとして、社會の或るものをモデルとして、描寫したものとしてみれば、之れをもつて想像することが、出来やうと思ふ。

2 【平和の秘訣】

筒様に離婚は、婦人の大不幸を將來するものであるから、一旦嫁した以上は、事

の破壊せざるやうに、務め通すことが必要である。併し若しも夫に隠し妻があつてそれを容れ換へやうといふ魂膽があるとか、或ひは姑が邪慳で、到底嫁を置く考への無いときには、所詮見込みがないから、さういふところには、強いて居る必要はない。縦令當人の行末は何うならうと、一刻も早く見切りを附けて、立派に離婚を取つて來るが宜しい。

併し又、爾ういふ恐ろしい悪企みがあるでなく、唯だ僅に感情の行き違ひや、衝突や、或ひは意志の誤解等の爲めに、起つた不和合ならば、穩かに之れを解決して、圓滿に治むる方法は、幾らもあるであらう。さういふところは、如何様にしても、勤め通さなくてはならぬ。之れを要するに、妻は夫に従ひ、舅姑に仕へなくてはならぬもので、昔から通つて來たのですから、之れを打破することは出來ませぬ。これは獨り我が國ばかりでなく、世界何れの國も同じことで、茲に事々しく言ふ必要はない。唯だ嫁たるもの、務め一つで、其の家が和合もすれば、不和に終はりもするのであるから、嫁の責任といふものは、仲々重いのである。

爾ういふやうにして、已れの足らざるところは補ひ、又悪いところは捨て、良い方に／＼と進んで行くのが、最も肝要なところで、これが即ち修養の第一義である。修養は何人にも必要であるが、特に新婦には、缺くべからざるもので、其道を守れば、一家の平和をはかる位のことには、さまで難かしくない。

然らば其の一家の平和を圖る手段は、何うすればいゝかと申すに、これは何人も知る如く、夫や、姑の機嫌を取つて、其の心を和らげるに限る。恚ういへば、何んだ、そんな平凡なごとと、言ふかも知れないが、これは平和の秘訣である。又、嫁の身として、夫や姑の機嫌氣襖を取る位のことには、何でもないものやうに思はるが、其の實は中々さうでない。特に邪慳な姑と來ると、機嫌位で和ぐものでないけれども、併し此の心で仕へて行く中には、自然に其の優しい心に同化されて、心の和ぐるものである。昔から爾ういふ例は尠なくない。

3 【嗜みの徳】

これは其の例とすべきものではないけれども、女の嗜みからして、夫の機嫌を取り直して、破鏡の悲しみを免れたといふ物譚で一寸面白いから、茲に記するのである。或る男が、何か妻の不都合を見出して、大に腹を立て、今日限り離婚するから早々出て行けと、申し渡した。妻は只管あやまつて、種々と詫びを入れた、けれども、頑固なる夫の聞き入るべくもあらぬに、一先づ實家に歸りて、又何とか思案を爲さんと、泣く／＼仕度を整へて、家を出でんとしたが、流石に取り紊した姿を、晒らして行くのも恥づかしく、そこは女の嗜み、直ぐ髪を結び直し、化粧をして、さらばと許り夫に一瞥を與へて、其のまま門を出でんとした。

此の動靜を、熟つと眺めて居た夫は、暫時と引き止め、其の門は汚れた女の出